山岸文庫蔵『海草集』解題・翻刻

牧野和夫
矢口郁子

『海草集』は平安末期から鎌倉初期にかけて活動した真言宗学侶・海恵僧都の別集である。海恵（一一七二～一二〇七）は、安居院澄憲を父とし、守覚法親王から法流を受け仁和寺に住した。その生涯は、夙に先行研究によって基本的事蹟が整理され、澄憲と高松院との密通の所生であること、若き日に高野山往生院に赴き悉曇関係書を書写していること等が明らかにされている。(注1) 藤原信西一門として、或は仁和寺の一学侶としても、その学識・文章製作の活動が注目に値すると考えられる。(注2)

本書はその海恵製作の表白・願文等、九十篇程を収載する。それらが用いられた場は、仁和寺内の宗教儀礼、女院や公卿主催の法会・諸修法、また、種々の追善供養・仏経供養など、多岐にわたっている。海恵一人の作品を収めるいわゆる別集であることは、注記に表れた代作行為が他史料と合致する点、海恵の近親者に関わる文章がある点、中でも「先師」が明らかに澄憲を指すことがわかる点などから、裏づけられる。(注3)

仏教儀礼に関する文章を集める別集としては、近時紹介をみた寛信の『雑筆集』[注4]、既に一部を残し翻字紹介を了えている守覚法親王の『表白御草』が先行するものとして知られるが[注5]、本書は願文・諷誦文・勧進文などをも含む点が特徴的である。文体としては、山岸徳平氏が指摘したように、『本朝文粋』・『本朝続文粋』を受け継ぐ四六駢儷文体といってよい[注6]。施主・願主には女院や公卿の名が見え、院政期の仏教法会盛行の様が窺える。また、有名な念仏者である明遍の為の願文や、特に光明山・高野山伝法院に関わる文章、九所明神などの神祇に関する諸草等も含まれ、当時の寺院システムにおける仁和寺御室や海恵などの位置と役割が明瞭に投影していると思われる。高野山伝法院は、承安三年（一一七三）三月に密厳院とともに仁和寺守覚法親王家に寄せられて以来、仁和寺御室との緊密な関係にあったのである。

本書中、作製年時が内部・外部から証明される文章が二十六篇あり、建久七（一一九六）年から建永元（一二〇六）年にわたっている。海恵の死没直前までの製作活動を留めるものと考えてよかろう。仁和寺内においては守覚法親王の晩年から、次代の御室・道法法親王の時代に相当する。

ここに簡略な書誌事項を記す。

実践女子大学図書館山岸文庫蔵

海草集二巻　　昭和十七年山岸徳平氏令写　　大二冊

紺布貼ボール紙製帙入。茶地表紙（二十六・八×十九・四糎）、左肩白紙短冊に「海草集上（下）」と墨書。右上隅に「貴」と墨書。右下隅に「共二」と墨書。

扉（原表紙の透写）、右肩「辰六」（ラベルの模写）、左肩より枠（題簽の模写、十八・六×四・六糎）を設けて、「海恵僧都表白集上(下)」と墨書、枠内下方、朱単辺（一・九×一・九糎）内「辰」と朱書。扉裏に「上巻欠題簽今便宜附之云云」と墨

書。

第一丁、表白紙、裏より、目録「静遍律師灌頂嘆徳　道寛阿闍梨灌頂嘆徳／能寛律師灌頂嘆徳　同灌頂初夜表白／……／／……」（略）……／／……／申権少僧都状　東寺僧徒袈裟奉状」、二丁半。内題なし。本文初行「　静遍律師傳法灌頂嘆徳（大阿闍梨法印 不明 僧都 不明 為人作）／金剛乗佛子等異口同音言夫秘密灌頂之事／……／／……」。無辺無界。字面高さ約二十三・〇糎、毎半葉九行乃至十行、送り仮名・訓み仮名・等、稀に附す（原文のもの）。又、眉上に注記あるも、原本のもののようである。処々に、山岸氏の手に係る注記（原本にない）もある。原本破損箇所を模す。本文五十八丁表迄。五十九丁裏・六十丁表）に原本の貼紙（おそらく縫紙か）墨書を模して枠を設け（二十四・五×八・〇糎）、「右表白集一巻憑木村太七購得／之（此一冊。癸酉春畠山牛庵へ見セ申候所慈鎮和尚筆ニ相極候故西山へ相伺別ニ一本写して御本ニ入置正本へ）／殿様（指上ヶ御道具ニ成申候也）／延寶八年庚申冬十一月」と墨書、六十丁表は略。六十丁裏に「巻首二十一葉者原本附下巻之後半焉今改修而二十葉復原型者也／第二十一葉右造立書写云云移下巻第九葉云云／昭和十七年大呂十一日夜一校了／洎ハ法ノ字也」と墨書。後遊紙（写誤の反故利用）一丁。以上、上冊。

下冊もほゞ上冊に同体載。全三十六丁（内、原本は三十五丁表迄）。二十七丁表より三十三丁裏迄、原本料紙大きさを裏単辺枠を以て示す。二十六丁・大きさ（二十四・九×十七・〇糎）、二十八・オ（二十五・〇×十七・〇糎）、等。

三十三・ウ

「交本批云／嘉禎四年三月十五日於大聖院御所／書寫畢三位僧都本也故海恵僧都／草也／

正和二十二女一雖令交合猪有不審耳

申請　　」と墨書。

三十四・オは、漢字熟字の字音・字訓を列記し、三十四・ウは唐歴代王朝の漢字（声点附）を列記する。

三十五・オに縫紙墨書を模して墨枠を設け（二十四・四×七・八糎）、「右表白集二巻憑木村太七購得／之／延寶九年辛

酉秋七月」

三十五・ウより三十六・ウ迄、山岸氏の注記（影印を参照）、今略す。

原本首、上冊（目次）、下冊（初行下方）に、各々、瓢箪型の「彰考館」印を朱にて模す。

なお、山岸氏の手に係るペン書紙片などを挟むが、全て省略する。

さて、本書の内容を試みに分類すると、以下のようになる。稿末の標題一覧表を付載した。標題の番号はそれに拠る。

標題番号	分類	標題番号	分類
1～9	伝法潅頂	44～51	忌日
10～11	結縁潅頂	52～53	孔雀経読経
12～17	御影供	54～56	出家
18～19	仏名会・忌日法会（仁和寺年中行事的法会）	57～61	修法
20～24	理趣三昧	62	願書
25～28	阿弥陀三昧	63～70	会・講
29～30	仏供養	71～83	願文
(31)～32	逆修	84～86	諷誦文
33～36	堂供養	87～89	勧進文
34～43	追善	90～92	奏状・申状

本書B本（山岸文庫蔵、高野山親王院本〔鎌倉写、上・下巻〕の透写本）は70までの内容を有しており、それを合わせ考えると、本書は大きく、表白と願文他とに二別されると思われる。

表白には、仁和寺寺家側の法会行事に関するものも、海恵自身が貴族・権門に招聘され導師を勤めた際のものも含まれ

る。また、追善供養などのように、供養の対象・目的ごとにまとめている箇所もあれば、一方で理趣三昧・阿弥陀三昧などのように供養の方法による分類を併用してもいる。この分類・排列は如何様に考えるべきか。

仁和寺では守覚法親王（一一六八～一一九八、一二〇二入滅）により、法会儀礼の「次第」が累積・整備されていたことは周知の如くである。[注7] また、それと平行して文章類の類聚が行われ、所謂『（十二巻本）表白集』『（二十二巻本）表白集』が守覚の周辺にて結実したと考えられている。[注8]『海草集』は、時代的にこれらの類聚を受け継ぐ位置にある。

例えば冒頭に灌頂関連表白を置く点や、理趣三昧などを分類項目として立てる点など、真言宗の重儀に対する意識は両「表白集」と共通していよう。

しかし両「表白集」の分類は、目的は様々である法事（例えば逆修、追善等という）の表白を、その形式・方法（供養する仏・経・修法の種類等）のもとに分類する点に特徴があって、網羅性・体系性を第一義としている。一方本書は別集であって、個人の文草という枠をそのままに、あとから両「表白集」的な分類構成を適用したものといえよう。恐らくは海恵の没後、弟子等の手によって編集されたと想像される。

編纂については、(35)の標題に見られる「前中将定家」の表記に注目して考えることが出来る。当表白の本文は失われているが、『明月記』に当法事に対応すると見られる記事があるため（後述）、海恵の作であることは疑い無かろう。「前中将定家」はむしろ編纂者の手に関わる問題である。藤原定家にこの呼称がなされ得る時期――承元四年（一二一〇）正月に中将を辞してから建暦元年（一二一一）九月に侍従に任ぜられるまで――を考え、この、海恵の没後間もない頃を編纂時期として推測する。勿論、生前の自草類の、海恵自身による、ある程度の類聚・整理は、寺院の法会システムの必要から当然行われていた、と思われる。

（一）仁和寺内の儀礼・法会に関する表白

御室を中心とする、寺家の組織的行事に関する表白については、潅頂関連、仁和寺年中行事関連、主に女院を施主とする供養関連、出家儀の表白、諸修法表白等が指摘できる。

守覚法親王以降、仁和寺では御室を頂点とする儀礼・法会の体系が加えられつつあった。それに深く結びついていたのがこれらの詞章であると考えられる。『紺表紙小双紙』中の各次第に密接な関連を持つが、時代的にはそれより降る位置にある。本書中の「御室」（標題下に「大阿闍梨御室」と注記を持つ場合がある）ついて、他史料からわかる限りでは道法法親王を指している（2・3・5・33）故である。

ではそれぞれの表白の注目すべき点について述べたい。

本書冒頭には伝法潅頂・結縁潅頂関連の詞章を配する。1～7については、相当する潅頂儀礼の様相が『血脈類集記』に見え、年時・大阿闍梨名・その他の役職を勤めた僧名などが判明する。たとえば本書の1では注記の大阿闍梨名が欠損しているが、これにて仁隆という僧侶であることが補える。また、2・3については海恵自身が嘆徳師を勤めており、一方「為人作」の注記がある1・5・7では別の僧侶が勤めていることが明らかになる。海恵自身、法会に参勤して自作の表白を誦した場合と、他の僧侶のために表白を製作した場合とがあることになろう。これにより、「為人作」とは代作を意味することと考えられる。

ここに見える文章形式で、嘆徳とはこの場合、伝法潅頂受者の素質・徳などを誉め称える詞章である。潅頂相承の淵源遠く広大なこと、戒を授ける大阿闍梨への尊敬を述べ、受者の新阿闍梨の殊勝さを賛美し、伝法に相応しい仏子であるこ

とを述べる。4・6の初夜表白も受者の才覚や修行を褒める点では似通った内容といえよう。8・9の嘆徳返答は、逆に受者の方から謙遜の意を表すものである。

名の現れる僧侶について付け加える。1の静遍は平頼盛の息男。密教の法流を受けたが、後に法然の門下に入り、念仏行者として知られている。2の道寛と7の寛俊は、按察使大納言藤原泰道の息男。藤原泰通は本書41にも名前が見える。

次に12～19は、年中行事的な法会に関わるものと考えられる。12～17の御影供は、『仁和寺年中行事記』では三月二十一日条に記され、また『紺表紙小双紙』ェ39・40に観音院での御影供次第が収められる。本書では、12には「大聖院」の注記があるものの、他は何処の堂にて営まれたものか不明。「伏惟」などとして弘法大師の遺業について述べた後、対比的に「大王」「禅定大王」の行とその功徳について述べる内容を持つ。これは法会の長吏である法親王を指すものであろう。但し17は、八条院が一千日の御影供を催した際のもので、寺家側の恒例行事とは言い難く、分量もやや短い。

18は『仁和寺年中行事記』で十二月の行事とされる、南御室御仏名会の際の表白であろう。文中「寛平太上皇、卜山宮始毎年之勤、餝道場貽永代之跡」と述べる部分が宇多法皇の事蹟を表す。

19は北院開祖済信の忌日法会の為のものと思われる。『紺表紙小双紙』ではケ1にあたる（目録のみ、本文帖は失われている）が、本表白では、「伝灯処々皆挑三密之法灯、其中門葉尤盛者当院本願尊霊也」と述べ、また「夫理趣三昧行法者……」ともあって理趣三昧による追善の性格を持つ法会であることがわかる。18・19は、基本的性格としては忌日法会であるものの、44～51の忌日関連表白とは区別してここに置かれるのはやはり本書の時点で年中行事的法要として成立していたことを示すのではないだろうか。

続いて20～22であるが、文言からは理趣三昧行法による追善法会であることが読み取れる。安楽寿院に於けるものであることから、鳥羽院の追善供養かと推測できる。八条院などを施主とする鳥羽院追善の記録は他史料にも多く見られる所

である。

23には「御室御参詣之次被行之」と注記がある。『紺表紙小双紙』ト8②奉幣八幡次第があり、「理趣三昧可在時儀」という一文も見られる故、そのような折のものであろうか。ちなみに道法法親王の石清水参詣は、『御室相承記』第六に、建保三年四月の記録がある。

24～32には、守覚法親王に関係の深い女院が施主として見える。鳥羽院皇女の八条院（一一三七～一二一一）、後白河院皇女で守覚の同母姉にあたる殷富門院（一一四七～一二一六）である。「故御室」の追善供養が営まれているが、守覚法親王を指すものであろう。守覚は建仁二年（一二〇二）八月二十五日に入滅している。

また29は八条院主催の母儀供養のもの。年時は不詳ながらも、文言からは、火災によって損傷した像を新立した事情も窺える。

33は、刑部卿藤原範兼の女・卿三位兼子（一一五五～一二二九）による、元久元年（一二〇四）十月十五日の中山堂（安楽心院）落成供養の際のもの。兼子は後鳥羽院の乳母として地位を得、建仁元年（一二〇一）には従三位に叙せられ権力を有していた。この時大阿闍梨を勤めたのは道法である（『仁和寺御伝』『御室相承記』第六）。この誦経導師表白を読みあげた僧侶は海恵ではないかと憶測するが、未だ不詳である。

続いて54～56の出家関連表白・57～61の諸修法表白に於いて、御室道法法親王が導師であることが他史料から確認できる。『御室相承記』第六に拠ると、道法が戒師として出家させた皇族は三人であるが、それが本書の表白三篇の内容に対応する。54の七条院（一一五七～一二二八）は後鳥羽院の母、55宣陽門院（一一八一～一二五二）は後白河院の皇女である。56の若宮は、後鳥羽院の皇子・俗名長仁親王（出家して道助）のこと。道法の後を継いで御室となるべき皇族であり、道法法親王の寺家統制にとっては重要な出家儀式であっただろう。この長仁親王出家儀については、「仁和寺御入寺 御出家 部類

記」（『伏見宮御記録』）に参勤僧侶の名までほぼ合致する詳細な記事が見られ、海恵が戒名の選申に関わったことも確認できる。皇族出家儀は重要な儀式であり、その際の戒師表白も寺内の文章として重みを持つものであったかと思われる。

続く57～61は諸修法表白だが、やはり道法法親王が修したものであることが、『御室相承記』第六「御修法事」より確認できる。57の対応記事には海恵の名も見える。これらの表白中には「太上皇」「太上天皇」「上皇」などと施主が記され、後鳥羽院を指すものと思われる。61は『御室相承記』第六から、後鳥羽院が熊野に参詣した折に行われたものとわかるなど、これら諸修法には、国家護持を職掌とする仁和寺の体質が表れているように思う。また、前後する52・53についてだが、孔雀経御読経は、やはり寺家内に於いて重要な位置を占めることは知られている。天候の不順などに対して、天下安穏・国家鎮護の立場からこの経の読経や修法が営まれるが、この二篇も例に漏れず、52は月蝕に際しての読経表白、53は病気治癒祈願の際のものである。

以上、寺家行事に関わると思われる表白類について述べた。御室の為、同胞の僧のための製作が含まれると思われる。勿論海恵が何らかの役職を勤める場合もあり（『御室相承記』第六には、「伴僧」として勤める彼の名が数箇所見える）、その際の式会の文章を製作することもあったか、と想像される。

（二）寺家外の仏事に関する文章

次に、仁和寺寺家の組織の一端を担う文章活動とは別質の詞章について述べたい。海恵自身が導師を勤めた例も『明月記』等から確認できる場合もある。恐らく血縁などを中心に、近親関係に依頼されての文章活動と思われるものもある。以下、供養の対象者・施主の人物に触れながら、幾つかの表白の例を挙げてみたい。

㉟「前中将定家亡母遠忌小堂供養在別」・㊴「（破損）中陰法事在別」については、目録にのみ標題が見え、「在別」と注記があって本文は存しない。さらに㊴の目録部分は原本に既に破損していた様が忠実に写されており、定かに判読できないほどである。しかしこの本文欠の状況はB本も同様であり、彼本での標題は「五条三位俊成中陰法事在別」である。

これらは『明月記』元久二年（一二〇五）正月十一日条・同正月十三日条・同二月九日条に対応するものと思われる。前年十一月三十日に俊成が没しており、定家は、四十九日の供養を催すこととなった。これが正月十三日の記事に当たる。「不幾程導師海恵僧都来臨。」とあり、海恵が仏・経を供養し「説法」・「供養法」したことが記される。その前々日の十一日条には、母の十三年遠忌供養の為に法華経を書写し終え、さらに地蔵像と千手観音画像を仏師に注文したことが見えるが、「以此蹤遂此願、以父恩報母恩。二親深恩重知之。」とあるのは、俊成の追善とともに母の遠忌供養もあわせ行なわんと考えたものか。これらの経と地蔵・千手の像供養が実際に行なわれたのは翌月である。同二月九日条には「申始密請海慧僧都、仏開眼遂之。地蔵木像、千手画像、自筆法華経、金光明宝篋印等也。無謁僧。布施兼密々送終了。」とあって、内々に海恵が招かれたことがわかる。

37「宜秋門院母儀北政所中陰被修臨時善表白」はやはり『明月記』から法会の様を窺うことが出来るものである。宜秋門院任子は当時後鳥羽天皇の女御であり、その母は時の権力者藤原兼実の妻・兼子である。没時は建仁元年（一二〇一）十二月九日。『明月記』によると中陰の正日・建仁二年（一二〇二）正月二十五日条には「女院御仏事。海慧律師導師。」と見える。『明月記』からはこのように、海恵自身が法会導師を勤めた記事が見られるのである。

以下は、海恵の出自である信西一門に関わる人物や、当時の仁和寺に関わりの深い人物について触れたい。

36仁隆（一一四四～一二〇五）は守覚法親王から付法を受けた。守覚が初めて伝法灌頂阿闍梨を勤めた、いわば一番弟子にあたる人物。法印にまで至り、没時は『血脈類集記』に従うと元久二年（一二〇五）正月九日である。当表白中には

「一周之忌景既欲来」、して堂・像を供養すると述べる。(42)にも、本文は見られないながら、この仁隆の中陰法事表白があった。

38の高階泰経（一一三〇～一二〇一）は、若狭守高階泰重の男。大蔵卿・従三位、後白河院の近臣で、鎌倉幕府との折衝にもあたった人物として知られる。海恵の祖父・藤原信西と高階家との関係は深い。高階経敏の養子となった信西は、さらに高階重仲の女を妻取って俊憲・貞憲・是憲・養賢・澄憲らの息を成した。この泰経は、澄憲の従兄弟にあたる。血縁関係からも信西一門に近い人物であるといえよう。泰経の没年時は建仁元年（一二〇一）十一月二十三日（『尊卑分脈』『公卿補任』）であるから、当表白は同年十二月末ごろのものかと推測できる。

40権中納言宗隆（一一六六～一二〇五）は、権中納言藤原長方の息男。母は信西女である。宗隆は権中納言在官中の元久二年（一二〇五）三月二十九日に死没した（『公卿補任』『尊卑分脈』）。

41按察使泰通は、参議藤原為通の子。按察使在任は建仁二年（一二〇二）七月から承元二年（一二〇八）六月まで。姉妹が藤原成範（信西子、澄憲の異母弟）に嫁しているという血縁がある一方、後、藤原成通の養子となり、息男道寛・寛俊は仁和寺に入寺している（本書2・7の伝法潅頂表白に見える）。仁和寺内に対しても親密な位置にあった人物かと思われるのである。

43静賢法印については周知の通り、信西の子、後白河院の側近であり、法勝寺の執行を勤めた人物である。当表白によると「忝崇階於一朝之渥沢、掌機務於数箇之寺院、徳望之被物、人以重之、賢慮之謀事、世以帰之」とあって、僧としての声望ばかりか、政治家としての一面をも生々しく伝えており、延慶本『平家物語』などの描く「静賢」を考える上で同時代の公式的な証言として貴重である（十二巻本『表白集』所収表白一篇と延慶本『平家物語』などの描く「重盛」との関係など。併せ考えるべき資料）。施主は不明だが、「遺孤」「旧僕」が集って嘆く中、「就中法眼和尚位、鞠養恩深、非唯

受身体髪膚、枕席徳重、偏致立身揚名」と、故人から受けた恩徳を述べる部分がある。

これらの表白本文中では、供養の対象者の徳を称えその菩提を願う点もさりながら、施主を中心に法事に至る経緯も詳しく記される。例えば36は「遺弟之遺悲」を述べ、一周忌にあたって施主の「法眼和尚以下、一門禅徒、同力合志」して堂・像を作る事を記す。「法眼和尚位、稟同胞之遺体、蒙慇懃之顧命、早致中陰之勤、亦営今日之善」とあり、中陰から墓堂建立まで、先達の仁隆を弔う為に仁和寺の僧侶たちが結集して修善を行なったことが読み取れる。施主や法会そのものに親昵してこその表現内容といえよう。

以上挙げたものは、本書中の没後追善供養に関わる表白である。そもそも中陰・追善といった仏事については、仁和寺内の『(十二巻本) 表白集』『(二十二巻本) 表白集』という産物に於いて分類・部立ては見られない。守覚法親王の草を集めた『表白御草』、あるいは「紺表紙小双紙」でも同様である。忌日といった恒例化する仏事と異なり、突然の人の死に密接な追善法事は、予め「儀式体系」や「類聚」に組み込まれないのであろう。また仁和寺の、王権守護・国家安泰祈願という役割から考えても当然と思われる。それを考え合わせると、本書の追善関連文章には、作者海恵自身の私的な活動が反映されているのではないだろうか。

本書末の二十篇余は、願文・諷誦文他の部にあたるが、そこでの注目記事に触れておきたい。本書中の「先師」(83・85・86) は澄憲を指す。澄憲の没したのは建仁三年 (一二〇三) 八月六日だが、83の四十九日の願文が建仁三年九月二十日であって、澄憲の死から四十五日目に当たること、85は本文中「右先師法印大和尚位、仲秋八月上旬六日、一息不及、両眼空掩以来」と入滅時を示していることなどからそれがわかる。これは本書を海恵の別集と考える根拠の一つでもある。また、75・76の高倉局は海恵の同母姉[注9]、86の求仏上人は、海恵の兄弟恵聖のことを指す (『尊卑分脈』) など、明らかに親兄弟の中での交流も認められる。また本書末尾には海恵自身の権僧都申状も含まれる。この前後には、僧侶の交流圏

を考える上で興味深い文章が存する。

71は、信西の息・有名な高野山蓮華谷の明遍僧都（一一四二～一二二四）が阿弥陀像を造立した際のもの。「御身中奉納願文」とあれば、阿弥陀像の胎内にも同願文を納めたものらしい。当願文の成立年時は不明であり、明遍の高野山入りとの前後関係もわからないが、阿弥陀の本願の頼もしい事、「是以弟子、早抛一生之名利、類浮世於薤蕖之露、深悲億劫之輪廻、凝観念於花池之浪」と厭離穢土・欣求浄土の志を述べ、最後は臨終の来迎への願旨で締め括るなど、念仏行者に相応しい内容となっている。(注10)

88の光明山は、東大寺の別所として発達してきたとはいえ、院政期には真言系の僧も入山している。明遍の滞在していたことは、よく知られている。当時の光明山は実範が没し、明遍が或いは高野へ去るかという頃にあたると思われる。

89の勧進は、「河内国石川郡太子霊廟之傍」に経蔵を建てる為のもの。これは河内の磯長寺のことを指すのであろう。「書写貞元入蔵録所載経律論等五千餘巻」を納め安置するとあり、平安末期・鎌倉初期の「経律論等五千巻」著録の『貞元釈教録』に基づいた書写一切経の一例として加えるべき史料である。(注11) 太子信仰に関係する資料としても価値があろう。

続く90の申状は、高野山大伝法院住僧が、宝塔の完成に向け仏像を安置せんとするもの。覚鑁の名を挙げつつ大伝法院の沿革を述べ、兼海草創の覚皇院にふれ、鳥羽上皇の御願を前例として引用し公家の助成を申請している。前述の如く大伝法院は、仁和寺御室の進止となっており、海恵とのつながりは、当然に緊密であった。

結語

『海草集』の分類構成や、収集する文章の用いられた場について検討し、施主として名の見られる人々についても考察

を加えてきた。海恵は仁和寺内では、儀礼体系を表白などの式文作製という面から支える位置にあったと考えてよい。守覚法親王より後、主に道法法親王の時代ではあるが、「次第」と表裏の関係にあるこれらの文章を収める点に、本書の特徴が認められる。

比較的短命に終わった、海恵というひとりの僧侶が草した表白などの諸篇は、平安本・鎌倉初期の仁和寺という寺院の法会システムに組み込まれた式文であり、駢儷文としての「新しさ」は、総体的に認めにくいが、光明山・比廟山や太子御廟、更に高野山の蓮華谷などを結ぶ寺院のネットワークとして観るとき、誠に興味深いものがある。とりわけて、覚鑁・兼海などの拠った伝法院方との具体的な交渉には、院政期・鎌倉初頃の宗派を超えた学侶たちの新しい交流によって結ばれたネットワークが、院政や信西一門に直結した寺院システムとして機能しはじめつつあったことを窺わせるものとなっている。平安末・鎌倉初頃の真言宗一寺院の「新しい」学問活動の解明につながる内容を十分に有した書といえよう。

注

（注1）山岸徳平氏「海恵僧都と海草集」（山岸徳平『日本漢左学研究』一九七二　有精堂）
角田文衛氏「高松女院」（角田文衛『王朝の明暗』一九七七　東京堂）
築島裕氏　「山岸先生と海恵僧都」（『汲古』12号、一九八七）
牧野和夫　『『海草集』影印・解説」（『〔実践女子大学文芸資料研究所〕年報』一〇　一九九一）
なお、製本時に写真の位置に誤りが生じている。頁226・上段（24丁裏・25丁表）→頁227・下段（25丁裏・26丁表）→頁226・下段（26丁裏・27丁表）→頁227上段（27丁裏・28丁表）と訂昭する。

（注2）牧野和夫　「安居院唱導と「母恩勝父恩事」―附、「因縁」、「止観談義」周辺資料の二、三について―」（『実践国文学』40号、一九九一）
同　「軍記物語と寺院と〝学文（学問）〟周辺―延慶本『平家物語』などを例に―」（『軍記と漢文学』汲古書院、一

九九三）

同　「舶載書二種について―『物類相感志』『捜神広記』―」（『実践国文学』40号、一九九五）

（注3）矢口郁子　「表白・願文作者としての海恵僧都―『海草集』の基礎的考察―」（『和漢比較文学』24号、二〇〇〇）

（注4）山本真吾氏　「奈良国立博物館蔵『雑筆集』五巻と高山寺本表白集―勧修寺法務寛信門流の表白集編纂活動―」（『鎌倉時代語研究』23号、二〇〇〇）

（注5）山崎誠氏　「建長六年書写覚洞院親快筆「表白御草」」（『国書逸文研究』16号、一九八五）

牧野和夫　「舶載書二種について―『物類相感志』『捜神広記』―」〈追記3〉（『実践国文学』48号、一九九五）

山崎誠氏　「国文学研究資料館蔵『表白御草』」（『国文学研究資料館紀要』22号、一九九六）

同　「守覚法親王と表白の類聚―『表白御草』再考―」（『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究（論文篇）』一九九八　勉誠社）

（注6）（注1）山岸氏論文。

（注7）『守覚法親王の儀礼世界―仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究―』（一九九五　勉誠社）

（注8）牧野和夫　「鎌倉初・前期成立十二巻本『表白集』伝本の基礎的調査とその周辺（1）・類聚ということ―附、知見新出安居院系唱導書類の紹介並びに補記数條―」より「補記」（『実践国文学』35号、一九八九）

同　「仲範撰述の一書『持犯要記俗書勘文抄』―紹介と翻印、附二十二巻本『表白集』目録一覧等―」（『実践国文学』42号、一九九二）

同　「十二巻本『表白集』編集とその四周―附、『大乗毘沙門功徳経』と本地物・拾遺」（『実践国文学』46号、一九九四）

山本真吾氏　「金沢文庫蔵二十二巻本『表白集』所収表白文体について」（『鎌倉時代語研究』18号、一九九五）

（注9）田中貴子氏　「法華寺の八条院高倉―来迎寺文書から」（田中貴子『外法と愛法の中世』一九九三　砂子屋書房）他関連論文は多い。

（注10）浜田隆氏　「蓮華三昧院絹本着色阿弥陀三尊像と明遍をめぐる浄土教」（『仏教芸術』57号、一九六五）参照。なお、遍照光院に阿弥陀立像（快慶作）があり、建久頃の造立といわれる（武笠朗氏教示）

（注11）落合俊典氏　「平安時代における入蔵録と章疏目録について」（『七寺古逸経典研究叢書』第六巻　一九九八　大東出版社）

〈標題一覧〉

本書は上巻巻頭に目録を有する。しかし、目録には標題が見えながら、本文が存しない表白が数篇ある。目録にて示された順序と、本文中の順序とでは、異なっている部分がある。そのため、本文中に於ける標題名（小字双行の注をも含む）と遍目順序とに従って示すこととし、本文が存在しない表白については、「　」として、目録に於ける標題名を挙げることにした。また、90～92は、本文中に標題が記されていないので、目録に於ける標題名を示した。

法会の日時については、本文中あるいは注記に示されている場合、ゴチック体で示した。また、他史料に対応する記事がある場合付記した。

標題	法会日時	他史料
1 静篇律師伝法潅頂嘆徳大阿闍梨法印（不明）僧都（不明）為人作	元久1・10・8	血脈類集記八
2 道寛阿闍梨伝法潅頂嘆徳大阿闍梨御室	元久元・10・21	血脈類集記八
3 能寛律師潅頂嘆徳大阿闍梨御室	建永1・5・24	血脈類集記八
4 能寛律師潅頂初夜表白		
5 行遍阿闍梨潅頂嘆徳大阿闍梨御室為人作	建永1・7・22	血脈類集記八
6 同阿闍梨潅頂初夜表白		
7 寛俊阿闍梨潅頂誦経導師為人作	建仁1・12・18	血脈類集記七

8 伝法潅頂嘆徳返答
9 同嘆徳返答
10 結縁潅頂乞戒導師表白
11 結縁潅頂小阿闍梨嘆徳小阿闍梨教源為人作
12 御影供表白大聖院
13 同
14 同
15 同為人作
16 同
17 同八条院一千日御影供開白
18 仏名後朝供養法表白為人作
19 北院六月御忌日表白
20 安楽寿院理趣三昧結願
21 同結願
22 同結願
23 八幡理趣三昧表白御室御参詣次被行之
24 殷富門院被修故御室御忌日理趣三昧表白
25 六条局阿弥陀三昧表白

26	殷富門殷故御室御忌日被修阿弥陀三昧		
27	殷富門院阿弥陀三昧開白		
28	同結願		
29	八条院普賢供養表白		
30	殷富門院地蔵供養		
〔(31)同院御逆修六七日在別〕			
32	八条院御逆修結願表白		
33	卿三位局中山堂供養誦経導師表白大阿闍梨御室	元久1・10・25	仁和寺御伝・御室相承記
34	中納言三位局中陰法事供養小堂表白	元久2・2・9カ	明月記
〔(35)前中将定家亡母遠忌小堂供養在別〕			
36	仁隆法印法事墓堂表白	元久3カ	
37	宜秋門院母儀北政所中陰被修臨時善表白	建仁2・1・25	明月記
38	高三位入道泰経五七日表白	建仁1・12頃カ	
〔(39)（破損）中陰法事在別〕※		元久2・1・13カ	明月記
40	権中納言宗隆没後供養一品経表白		
41	按察使泰通正室中陰法事		
〔(42)仁隆法印中陰法事在別〕			

43 静賢法印没後四十九日修善表白		
44 八条院被修鳥羽院御月忌表白		
45 同		
46 同		
47 殷富門院被修上西門院御月忌表白		
48 同御忌日		
〔(49)(50)先師法印先妣遠忌修善表白二首在別〕		
51 仁隆法印被修故御室御忌日表白為人作		
52 一品内親王孔雀経御読経発願表白月蝕		
53 無品親王虐病御祈孔雀経御読経表白		
54 七条院御出家表白	元久2・11・8	御室相承記六・明月記
55 宣陽門院御出家表白	元久2・3・13	御室相承記六・明月記
56 若宮御出家表白	建久1(ママ)・10・17	御室相承記六・仁和寺御入寺御出家部類記(『伏見宮御記録』)・猪隈関白

57	普賢延命御修法表白元久三年三月二十四日	元久3・3・24	記・明月記
58	五大虚空法表白建永二年十一月十七日(ママ)	建永2(ママ)・11・17※※	御室相承記六
59	愛染明王法表白元久二年三月廿一日	元久2・3・21	御室相承記六
60	同元久三年閏七月廿六日	元久3・閏・7・26	御室相承記六
61	千手法表白建永元年五月一日	建永1・5・1	御室相承記六
62	願書啓白若宮御瘧病時勤之		
63	或所蓮華会導師表白為人作		
64	毘沙門講表白為人作		
65	聖徳太子影供祭文	元久3・1・29	
66	大乗講表白大進公		
67	同大輔君		
68	鎮守講表白大輔向		
69	同備州		
70	会中講表白大進公		
71	明遍僧都奉造立阿弥陀御身中奉納願文		
72	或女房奉納護中願文		
73	叡山千本卒塔婆供養願文	元久1・7・80	

74	有上人書写供養大般若経願文	
75	高倉局自筆経供養願文	
76	同人修八講願文	
77	成海法眼熊野詣御明文	
78	大岡入道五七日願文女子北条妻修之	
79	任性阿闍梨十三年遠忌供養一品経願文旧僕僧瑩之	建永1・12
80	或女房亡父遠忌修善願文	
81	或小僧亡父五七日修善願文	
82	貞覚僧都四十九日願文弟子貞雲阿闍梨修之	
83	先師法印中陰法事願文	建仁3・9・20
84	或上人大般若供養諷誦文	
85	先師法印四十九日諷誦文	建仁3・9カ
86	求仏上人為先師修善諷誦文	
87	深草上人堂舎勧進帳	建久7カ
88	光明山地蔵供養勧進帳	
89	聖徳太子御廟一切経蔵勧進帳	建久7・8
90	高野山伝法院奏状	
91	申権少僧都状	元久1・5

92東寺僧都袈裟奏状　　元久1・8

※　B本によれば「五条三位俊成中陰法事在別」。

※※　建永二年は十月に改元し、この日付はあり得ない。『御室相承記』第六には建永元年十一月十七日に道法の五大虚空蔵法の記録がある。あるいは『海草集』の誤写か。

〈附記〉

かつて、故亀井孝氏旧蔵『悉曇要決鈔』三巻三冊の書写識語を紹介したが、賢宝の手許には、海恵自筆の典籍類が存在していたようである。今夏、披見することを得た東寺観智院蔵『金剛感應決』30函64号は、海恵自筆の可能性が極めて高い一点である。詳細は、別稿参照。また、かつて紹介した東寺観智院蔵『海恵僧都詞（外題「嘆徳草」）』軸は、『海草集』所収「能寛律師灌頂嘆徳」と同一の嘆徳であることが判明している。辞句に多少出入あり。

海草集（旧彰考館蔵本）翻刻

〈凡例〉

一、文字は原則として通行字体とし、異体字も通行の字体に改めた。但し底本のままに記した箇所もある。

一、虫損・破損等による欠損文字は、一字の場合は「□」、それ以上の場合は「［　］」で示した。残画によって判読できるものは「（　）」で括って記した。また判読できなかった文字も同じく「□」で示し、右側に「(?)」を附して欠損箇所と区別した。

一、傍書による訂正箇所は、改めた形に翻字し、「〈　〉」で括って本行に含めた。補入記号「。」がある場合も同様に「。〈　〉」とした。

一、墨線或いは「ヒ」「止」の傍記等を以て訂正（異本注記等も含む）したミセケチ箇所は「≪　≫」に入れ、その下に「（　）」で括って本行に含めた。

一、声点は底本の位置通り文字の傍に「。」「。。」と示した。

一、眉上注記箇所は、これを全て割愛した。

一、翻字者による誤字等の指摘を「（　）」に入れて記すことがある。

「辰六

海恵僧都表白集上

」（〈原表紙〉扉）

上巻欠題簽今便宜附之云云

」（見返し）

（白紙）

」1オ

静遍律師潅頂嘆徳　道寛阿闍梨潅頂嘆徳

能寛律師潅頂嘆徳　同潅頂初夜表白

行遍阿闍梨潅頂嘆徳　同潅頂初夜表白

寛俊阿闍梨潅頂誦経導師　伝法潅頂嘆徳返答二首

結縁潅頂乞戒導師　同潅頂小阿闍梨嘆徳

御影供六首　仏名後朝供養法

北院六月御忌日　安楽寿院理趣三昧結願三首

」1ウ

八幡理趣三昧　般富門院被修被故［　　］

六条局(阿弥)陀三昧
殷富門院阿弥陀開白
八条院普賢供養
同院御逆修六七日 在別
卿三位局中山堂供養誦経導師
前中将定家亡母遠忌小堂供養 在別
宜秋門院母儀北政所中陰臨時善
□□□□中陰法事 在別
□□□□法事
静賢法印没後四十九日修善
殷富門院被修上西門院御月忌
先師法印先妣遠忌修善二首 在別
一品内親王孔雀経御読経発願
七条院御出家
若宮御出家
五大虚空□法
千手法

殷富門院故御室忌日被修阿ミタ三昧
同結願
殷富門院地蔵供養
八条院御逆修結願
中納言三位局中陰法事小堂供養
仁隆法印法事墓堂供養
高三位入道 泰経 五七日
権中納言 宗隆 没後供養一品経 」2オ
仁隆法印中陰法事 在別
八条院被修鳥羽院御忌日三首
同御忌日
仁隆法印被修故御室御忌日
無品親王瘧病御祈御読経発願
宣陽門院御出家
普賢延命法
愛染王法二首
願書啓白 」2ウ

蓮花会導師　　毘沙門講
聖徳太子□影供祭文　　鎮守講二首
会中講　　大乗講二首
明遍僧都奉納阿□タ御身願文　　或女房奉納護中願文
叡山千本卒塔婆供養願文　　或上人大般若供養願文
高倉局自筆経供養願文　　同人修八講願文
成海法眼熊野詣御明文　　大岡入道五七日願文
仁性阿闍梨十三年遠忌願文　　或女房亡父十三年遠忌願文
□願文　　貞覚僧都四十九日願文　　└3オ

□諷誦文　　求仏上人為先師修善諷誦文
先師法印中陰法事願文　　或上人大般若供養諷誦文
深草上人堂舎勧進帳　　光明山地蔵供養勧進帳
聖徳太子御廟経蔵勧進帳　　高野伝法院奏状
申権少僧都状　　東寺僧徒袈裟奏状　　└3ウ

静遍律師伝法灌頂嘆徳（大阿闍梨法印[不明]僧都[不明]為人作）

金剛乗仏子等異口同音言夫秘密灌頂之事
業者上根頓入之方便也神通之宝鞜凌〈淩〉虚空
発意則至所詣金剛之内庫排開鑰容身
則達究極法爾之妙用也誰残疑於龍虎之
嵐雲深奥之儀則也喩学獲於牛麟之毛
角教之択機不其然乎爰現前大阿闍梨耶
法印大和尚位権大僧都両壇伝燈朗於九枝
之光五瓶瀉水深於七葉之波蘭陵之風譲匂
□芳尚薫於禅室竹園之月分光残暉方

└ 4オ

□(砌)是以聖主之抽高徳也降恵沢而既為
一門之長龍神之致感応也灑甘雨而速除
九州之愁実是仏家之棟梁法衣之領袖者
歟方今知時兮伝□以所授者毘盧遮那最
上乗根本密印契鑒根兮餝道儀所許者
新阿闍梨法橋上人位伏惟受者学行窮
満雖為善男善女之師範鑽仰無飽重入
三部五部之壇場忘身深求教慣常帝行

東之志竭心更受法希広智還西之跡戒
珠瑩互瑩争光。〈於〉楚山之下心鏡浄弥浄編
」4ウ

影於秦台之上加之霊嶽臥雲変妄薪
於壇中之煙学窓積月腐(クチタリ)春木於屋上之
霜誰不随喜之誰不称歎之仍率鸞鳳之
群敬作蹦蹦之礼

道寛阿闍梨伝法潅頂嘆徳(大阿闍梨御室)

金剛乗仏子等異口同音言削漸階而受一法身之
位号之授職越戯論而浴五仏瓶之滴名之
潅頂授職潅頂実有所以哉是以住於自在神
力加持三昧設内證示凡境依於師資付法血
」5オ

脈相承自中華(クワ)及辺域何唯十地無垢之大(士)
待護念於紺螺之頂四州輪王之長子潅海
水於白象之上而已哉誠知如来秘蔵弘在其
機者也爰現前大阿闍梨耶二品大王稟唐尭
就日之餘光再耀仏日継広智不空之遺跡

悟朗大官一人之致崇敬也非唯芳仙蕚(カク)於瓊(ケイ)樹(タマ)
万方之帰霊徳也深仰定四荒於一念暨(ヲヨブ)于鑒
利根而許印可率門葉而儼道儀代々修練
之室壇場不変而花馥嫡々伝法之庭泉
石粧旧而苔鮮彼准南神仙之栖鶏犬去。〈為〉

而雲永断梁孝宴遊之園台観傾而月独然
豈如此砌古松老杉之成墻也春色添六葉之
緑画梁繡柱之令構也夜霜期千廻之秋方今
受者新阿闍梨耶度量深心性争勇鋭於莫
耶之雌雄種族無瑕玷比家門於唐虞之二八上
智不拘超権乗帰真乗中瞻早露遂宿望
観宿縁定知随喜動諸天之意感応通列祖之
眸者歟仍啞羊応教而上称嘆之詞龍象引

衆而作拝揖之礼

能寛律師潅頂嘆徳 大阿闍梨御室

秘密潅頂之大道其源遐哉流派広分我朝雖

」5ウ

」6オ

胎八家之跡相承是貴梵風唯盛一門之間
広智再帰南天之月受遮那根本最極伝法之
密要弘法独留西唐之雲蒙如来深奥究竟真
実之印可比之他家猶如辺裔之遙隔中夏
論之餘流甚於牛涔之不及鼈海吾宗超絶

」6ウ

其不然乎爰現云大阿闍梨耶二品大王遠稟寛
平之曩蹤近継長和之古跡統彼密蔵聚此禅室
観夫挑六代十善。〈之〉戒光弥朗伝燈之輝誇唐棣梁竹
之累葉久翫曼荼之尊法依人弘誠哉斯言方今
□頓機於数万之群英刷道儀於伝持之伽藍授職
添数三摩耶之戒場雖旧荘厳加餝両部界之密
壇惟新伏惟受者新阿闍梨耶権律師法橋上人位遁
棘路尋覚路辞羽林入禅林法器無傾堪写五如来
□智瓶勇鋭在心誰惜三秘密之恵鈔何況忽応

」7オ

聖明知人之採(択)可謂寂遷矣忝預賢慮間(機)
□聴許是非宿縁偸催哉人皆驚鄭重之嘉会

衆各述随喜之懇懐昔釈尊付属之法衣迦葉伝
(而)将献慈氏今大王付嘱之法衣受者服而観示集会
彼者入鶏足坐禅之窟待下生於一増劫之後此者当
龍象群列之砌受拝揖而三十口之衆聞旧見新(誰)
不称嘆(マヽ)仍保山木之短才敬讃仏種之不断
《能寛》(同)律師潅頂初夜表白
蓋聞秘密(ヒヒ)心殿之幽邃也尚開観照之門性円徳海之

」7ウ

湛然也広分付法之流是以金剛薩埵扣秘家之後(後)
二十余代之血脈無絶普賢闍梨受職位以来梵漢□(和)
国之軌躅長存神変加持誰得測知方今受者権律師
法橋上人位志在求道懃欣頓門大度勇鋭者性
□稟也故不滞一乗二乗之辺教瑜伽観念者心之
所励也故早学理界智家之大法何況器宇仲遐而
無橈可謂仏家之棟梁焉彩鳳降倫授位豈非吾
道之羽翼哉仍開両部秘奥之密壇以許累代相承之
印可伏非油麻諸仏八葉列祖朗恵眼致證明運神

」8オ

□垂護念然則薫修積年久流持念不退之誉
伝授知時莫招最後断種之謗敬白

行遍阿闍梨潅頂嘆徳（大阿闍梨御室為人作）

金剛乗仏子等異口同音言夫秘密潅頂之軌則
其義邈哉遍覆初生如来垂跡於南印度之
境高祖遍照金剛訪道於青龍寺之砌以来
仏性三昧耶之浄戒亘三国而無絶秘密両部壇之
伝燈過廿代而尚盛法之最上得不可称爰現前

」8ウ

大阿闍梨耶二品大王尭雲分膚（ヲホウ）戇（ヲウ）万方而慈悲利
物舜日残暉照八埏而霊効被世教海之湛心府
也綜（スヘテ）諸流而不知其深学花之綻（ホコロフ）意樹也臨季葉
而弥増其芳因茲北闕南面之尊割白弟以致崇
敬臥雲喰霞之侶合掌花以従左右爰（受）者訴
阿闍梨耶少日習業多年陪室学印受明忝
蒙提耳之訓功成材彰（サイアラハレテ）今登潅頂之壇于時
列砌諸徳相語曰山溜穿石即是漸靡之人々
然也埃塵成岳便知勤労之不空矣釈梵随

喜之至推理無疑聖衆證明之趣以顕密冥助

傾十字之頂各刷（カイツクロフ）三拝之儀

同阿闍梨潅頂初夜表白

夫以妙法一乗者応仏出世之本懐也尚残勿妄宣伝
之厳誡焉瑜伽三密者法身内證之自覚也宜
択大度勇鋭之頓機矣是以麟角抽高材始
授職於遐猛龍智之昔象王垂護念及血脈於
二十二代之今号之伝法誡有由哉伏惟受者新
阿闍梨耶入師門而克（ヨク）守正軌学密蔵而専求
精要慇懃誠深水澄懇疑之。府（ツカサ）練行無倦花
飜専念之壇仍勤道儀以許印可然則戯論

「9オ

云尽早除六十心之塵垢蓋障無残久累一百
歳之薫修敬白

寛俊阿闍梨潅頂誦経導師為人作

夫以秘密潅頂之相承其源遐哉那伽刺樹那菩提
薩埵開鐵塔受金薩大広智不空阿闍梨耶自

「9ウ

南天来宸旦自爾以降五瓶之水達流達潤(ウルヲヒ)於(櫟(ヨ))
樟之浦両壇之燈遙照耀光於扶桑之国触
其餘耀之人皆是大度勇鋭之頓器也酌彼
末流之倫莫非如来神変之加持矣伏惟現前
大阿闍梨耶権大僧都法眼和尚位。〈家是〉前疑後従蘭

」10オ

台棘路之跡不賤誉亦釼南河北三密一宗之
功尤深智行兼備宛如島之両翼鑽仰功成何
異麟之一角至如夫運歩而詣雲崛忘身
而祈悉地白雲埋跡藉(シキテ)草(ヨチ)而累歳月青嵐払
枕絶粒(イチツヒ)而渉旬日練行之至誰不帰敬方今徳聖
顕而綱位已高感応交而伝法時至即擺(ウチハラヲテ)先(師)
持念之道場亦刷嫡身授職之軌儀爰受者
新阿闍梨耶稟蓮府之遺塵清花伝芳列
桑門之後生機根克調提撕守訓無乖(ソムク)孔鯉
過庭之誡精勤不怠常欣瘦(シウ)鳳陵雲之志

」10ウ

今愍恵可断解之懇誠方蒙遮那潅頂之

聽許人皆随喜仏定護念抑六天之魔醯首
羅作障於成道之砌四部之毘奈夜迦求隙於観
念之床仍叩鳧鐘而驚十方之仏土願傾烏瑟
而臨両部之密壇諷誦之趣蓋以如斯

伝法灌頂嘆徳返答

金剛仏子性暗菽麦材非橡樟意無以針沈鉢
之智争討写瓶之渕源誠隔執刀新臂之思
何列伝燈之血脈然今適当機縁純熟之今。〈時〉忝
受遮那印可之昔法齢僅二旬伝五智灌頂之(職位)
身亦少年蒙大王提耳之慈許進謂当時之浩
恩両肩疲而難荷負退憶往劫之宿縁双眼
溺而湿蘿襟況復聞龍象讃嘆之詞如海鳥之
驚鐘見鸞鳳拝揖之儀同山鶏之対鏡屡顧
無智無徳之微躬只存能礼所礼之空寂而已

同嘆徳返答

金剛弟子禅林之附枝法苑之凡卉庸材而鑽
仰謝蒼殺青之業空廃浅智而観行少徳瀝

」11オ

丹之誠惟疎爰蒙禅定大王之聴許受遮那法
帝之印璽密□(?)業伝道苟継遺蹤於龍樹之塵

11ウ

賢瓶酌流忝浴恩波於鶴洲之水方今諸徳引
烈先規存例機龍轅兮褒讃述趣陵雲之
詞驚耳顧羊質兮競《揚》(場)失図踏水之歩寒
心仍以三拝之厳重奉譲両印之聖衆矣

結縁潅頂乞戒導師表白

夫以三学分手雖任群機万差之性欲四輩傾首
不如仏性無漏之律儀是以先薫戒香除垢穢於
具縛之凡身以投覚花知有縁於曼荼之尊
位名之結縁潅頂実有所以哉爰現前伝戒大阿
闍梨耶禅定二品大王早出金輪十善之家永

12オ

入鐵塔三密之窓以来兎園春花遠移菴
羅林之匂桂山秋風遙伝那伽樹之響三聚浄
威之珠勝龍女一顆之光十重尸羅之衣超商
那九宮之粧方今承蘭坂数代之芳躅勤蓬宮

万年之御願師子床上四無碍之妙弁雖旧龍
象座前三平等之威儀惟新抑尺尊説一仏
乗也因舎利子之三請遮那開無尽蔵答金
剛手之九問今愍啞羊之懇請早出法螺之
円音

結縁潅頂少阿闍梨嘆徳少阿闍梨教源為人作

」12ウ

金剛乗仏子等異口同音白言四輩結縁之大会者
万代不易之御願也訪其濫觴則自唐室伝日
城謂其興隆亦始東都盛西郊龍図鳳扆之
明主降絲綸而致崇敬雲衲霞衾之群英列
会場而懃軌儀信男信女之戴木叉也三聚
之戒香薫心緇衣白衣之臨花壇也五瓶之智水
潅頂会之鄭重誰不随喜爰当潅頂阿闍梨耶
上根稟機久弛大度勇鋭之誉練行積功稍得
秘密神呪之験深洞忘身而多年採菓汲水霊
峯枕肱而数日絶粒茹芝蒙其護持之人

」13オ

多除宿業難転之障憑彼潜衛之輩深抽
帰依渇仰之誠持明之悉地不恥于古者歟方今
伝釈門之芳躅忽応聖明採択之撰掌密
蔵之秘鑰速開頓機引入之跡亜羊謬当称
嘆之仁龍象各致拝揖之礼

御影供表白大聖院

夫以尺迦文仏之帰円寂也類遺身於白玉之粧
弘法大師之入禅室也留真影於丹青之色大聖胎テ
化誰不帰乎是以禅定大王迎結跏之日致合掌之

礼緯為竹園之恒視儀添花壇之荘厳状惟高
祖大師払嶌(ケウ)塵(カマヒスン)於洞裏之風遊精神於都率之
雲金剛定中悟真理兮證法身摩尼殿上鑒
遺跡兮廻天眼。〈有信必有感〉如磨(トク)鑾(ミガク)鏡而写像致誠亦致福
同打鳧鐘而出声彼波利三蔵者覚母之眷(属)
也智者禅師者薬王之後身也山窟閟(トチテ)而永幽雲
暗往来之跡石龕(カウ)開而忽空嵐払留身之床是
如吾大師坐禅年旧万方運歩於廟門之月

└13ウ

感応日新四輩洗罪於谿流之波方今大王扇　└14オ

十餘代之遠風浴三秘密之法水昼夜調三業
魏闕之九重仰徳聖壇場運一念胡城之万
里払煙塵重酬知恩報恩之勤行更顕難思
難解之法験然則戒恵薫修之法躰蒙三重曼
荼羅之護持香花不退之禅室除四部毘奈夜之
障難

同

夫以金剛一乗之道幽則幽秘金言於五年之間鉄□(?)
三密之窓源尚深閉鐵扉於七百歳之前泊于　└14ウ

夫釈尊十三代付法誕跡於南印之塵遮那第
八葉之折負忘命於西唐之雲福智円満之月
輪始照月氏除暗遍明之日光方耀日域伝法
之聖者誰測其恩者乎伏惟弘法大師陋近智
慕遠聞所渉者溟渤之万里厭浅教求深
□所遊者和漢之両国遂則究渕源於青龍之

流宛如瀉瓶水挑伝燈於丹蛍之光全無傾鉢
油至如夫伝潅頂於十餘代留金身於数百歳門
風匂芳竹園之枝瀆響洞月影清松渓之

」15オ

(水)通光是唯相承之年旧乎抑亦感応之日
新也方今禅定大王迎結跏趺坐之期致稽
首頂戴之誠滓為恒視敢不失墜桜杏(カウ)桃
李之篋幡蓋也自成花蔵界之粧梵唄歌
讃(過也)之過雲漢也蓋驚都率宮之聞願降(クタテ)二第
(四)之欲天(ヨリ)一明鑒無二之心地然則大王保法躰於
龍花下生之春　嗤(ワラフアサム《カム》)　阿素羅窟之幽闇延恵命
於鶏足出定之暁期翅頭摩城之値遇

同

」15ウ

伏惟弘法大師学窮諸業勤綜衆芸赴覚
路而欣速如麒麟(キリン)之馳万里入仏海而求深似驪(リ)
龍之　蟠(ワタカマル)　重渕是以披百家九流之文厭拘世俗(之)
塵網訪一乗十玄之談嫌非神通之宝輅遂則

得七軸於鳳塔之下知有如来甚奥之秘蔵飛孤
軏於鼇海之上懃求遮那自證之密法当彼時
也水底沈針受。〈智〉水於曼荼之壇雲中投杵布
法雲於扶桑之国昔一切有宗之盛闕賓焉
便是未田尊者之神力也今三密教法之弘日域也矣
（寧）非弘興法大師之加被哉彼乞大地於龍宮験

」16オ

法滅於秋水之潺緩此設道場於鳳城致修練
於春風之和暖以古比今々還勝古爰禅定大王相（マヽ）
永。〈ニ〉貴伝南山苔洞之風而十餘代紹隆尚盛翫西
郊竹園之月而第五葉運歩於臥雲坐禅之
峯呉坂楚嶺之嶮岨忘疲凝信於毎月謝徳
之莚箕（クキ）風旱雨之感応何宝願受蘋蘩之
礼奠速授松柏之遐算然則大王同普賢閣
梨之栖菴羅林久積七百歳之薫修伴広
智三蔵之在興善寺再崇三秘密之教邇□
時属三陽之上月人誇遅日之嘉景蘿□納（ヘキ）薛

」16ウ

襟之接座皆仰唐棣万春之粧鄒生牧叟之
列園各憩梁竹千年陰
同為人作
夫以鼇波万里之西棹扁舟兮忘命鳳城九重
南卜禅室兮結跏則是大師之徳行誰不帰敬乎
是以禅定大王当黒月之六月抽丹地之一心滓為
恒規勲期来際(サイ)伏惟大王生貫三滅五之家類
万乗宝位於蒂芥(カラシ)嗜(タシナム)六大四曼之教比九種
(住)心於糟粕龍雲虎風之感至心自応漢宮魏
(闕)之后稽首仰徳定知高祖擁護屡加法体(者)

□弥依毎月之勤行久侏遐年之宝算爰在
座禅侶各相語曰昔無畏三蔵之為釈□(種)之苗裔(ヘツコ)
也抛万機而求覚王之教今禅定大王之稟仙蕚
之餘芳也契千秋而報祖師之徳彼出俗入真此施
流尋源時代雖異懇志是同然則蘭坂風底
金磬報万歳之響花壇月前鑁乳加不死之
味

└17オ

同

夫以覚王之居尼咥天宮也制教者而御群
類法帝之排秘密心殿也遺衆聖而化辺鄙
奉受其勅人出自法界之一門為其使輩

」17ウ

多潜不退之十地吾大師遍照金剛蓋其一也
伏惟高祖聖霊垂迹於橡樟蔽日之浦留身
於松杉(サム)帯雲之嶺坐禅年旧雖扶春秋之星
霜感応日新猶類箕畢之風雨是以禅定大
王冀梵鐘之遺韵忍覚花之餘気儲礼奠於
一日拝真影於毎月観夫蘿服正兮似澄亡水髣
髴乾臨閣請雨之昔貌菓脣鮮兮有湛詞浪
宛然納涼房望雷之古儀不覚之涙浮眼自然之
感銘肝方今在座禅侶各相語云彼鄒魯之常
(以)仲尼為先聖此瑜伽之室以大師為高祖称雅

」18オ

頌唱唄讃崇重礼雖同宣五常弘三密真俗訓
遙矣何唯抽懇誠物無二之心地亦可期照覧於第

四之欲天者歟然則禅定大王誇金剛定之辺
際嗤(アサムク)世禅於藍子之八万劫長持明仙之秘方褊(ワラフ)
薬術於彭祖之七百歳敬白

同八条院一千日御影供開白

伏惟弘法大師内秘地住之位外示沙門之形初出
俗入真偸嫌儒道之尚浅後捨顕求密深厭
権開之未開遂則三秘密之奥旨凌波濤而遙
弘両部壇之伝法積星霜而尚盛思其遺徳

方宜致報謝方今禅定仙院宿執暗催早扇
南竺之風往因偸熟幸酌東寺之流仍修一千
日之勤行以期多生劫之値遇者也仰願高祖大
師遍照金剛廻蓮眼垂証明照棘心致随喜然
則仙院送春秋於仙洞大椿争影累観念於仏
室心蓮終開敬白

仏名後朝供養法表白為人作

夫仏名懺悔者礼過現当之千仏凝丹誠於覚
月之前浄身口意之三輪掃(ハラフ)黒業於恵日之光

└18ウ

実是性海之要津仏道之直路者歟是以寛平
」19オ
太上皇卜山宮始毎年之勤餝道場貽永代之
跡当其後朝又修密行蓋起自嚢祖大和尚之素
懐亦盛于当時法親王之紹隆方今所召者三重万
荼之聖衆刷妙相輝不来而来之玉毫所修者
五字厳身之妙行作手印仰拳足下足之金言
願受雲海之供具速施水月之感応先捧善根
上分奉資本願聖霊十地満足之暁空三妄
執之雲忽寄四種法身之秋月十六分之光正円
□則梁園之風景無変満寺之人法共感掬多
七百歳譲遐齢於吾君那爛二力徒類繁昌於
」19ウ
我寺乃至法界平等利益
北院六月御忌日表白
夫以高祖遍照金剛棹扁舟凌西海之浪貞観
寺権僧正入密壇継東寺之流以来写瓶家々
各写五智之宝瓶伝燈処々皆《挑》(伝)三密之法燈

其中門葉尤盛者当院本願尊霊也観夫蘭
陵竹園之継踵(クヒス)也悉承其遺塵賜紫崇斑之
駕肩也幾浴彼餘流経行昔栖松柏之影無変
坐禅古室梁棟之構如旧積善餘慶得不可□(称?)者歟(?)
方今禅定大王迎遷化之忌辰肆恒例之斎席

└20オ

一寺之禅侶成群満堂之軌儀惟新夫理趣
三昧行法者如来唯一秘要(マヽ)之方便染浄不二頓
證之径路也三毒自性無戯論之説混真妄於一理
十七清浄菩薩位之談示迷悟於同躰即身成
仏之深旨専在此典者歟是以広智三蔵製一
巻之本釈述仏語之深秘弘法大師注数軸之
開題顕真文之旨趣凡厥功能誰測辺際然則
尊霊花蔵霞中弥添道悦之法楽蓮台月
前明鑒謝徳之勤行兼又大王万歳諸徳安穏
竹園春風匂久使我君同東父西母之遐年松

└20ウ

門秋月光静令吾寺伊青龍玄法之曩日

安楽寿院理趣三昧結願

夫此行法者瑜伽十八会之肝要適悦三摩地之心府也一十七聖之曼荼顕尊位於他化天之雲五秘密品之奥旨示自證於一蓮台之月始終共説薩埵之内徳首尾同教頓悟之方便是以受持読誦之勝利開覚悟於十六生作意思惟之功能滅罪障於無数劫然則禅定聖霊煩悩氷解以功徳之水清澄妄執雲(巻)七覚分之月方明兼又禅定仙院宝算契千秋洞雲之膚無惨玉躰期万春

院花之色久盛

同結願

夫以此妙典者染浄融通之指南速疾成覚之真路一十七品之曼荼　碱(シナヘニス)　荘厳於法界宮之月八大菩薩之自證分功能於利衆生之風誰疲三無数劫之長途可期十六大生之覚路者歟然則聖霊覚山雲晴忽払五住之闇性海水澄永止七転之波兼又仙院仙洞塵　斂(ヲサマテ)　寿域日遅契謝徳於万

└21オ

年之冬期薫修於三会之暁

同結願

今此行法者覚悟之頓門也混染浄於一理解脱之
要路也消障累於多劫薄伽梵之開秘蔵也広縁
諸乗之奥旨金薩埵之顕自證也遙被濁世之
群類金文玉偈之功力不愆(アヤマタス)。三日九時之勤行
何空然則聖霊肉団蓮開早出二死之淤泥
面輪月明永払三妄之雲霧兼又仙院長生
久視之室前松洞之松無変瑜伽観念之窓
裏花壇之花久芳

八幡理趣三昧表白御室御参詣之次被行之

夫以法性山静無相之真理雖不動焉権化地深和
光之示現今尚新矣伏惟八幡大菩薩者内証位
高西方九品之三尊並貌外現不賤本朝万乗之
列聖垂跡。刪(サム)提嵐国之往縁則一化独在此四
恩応神天皇之遺徳亦累代永受其賚(タマモノ)実(ライ)

└21ウ

└22オ

是朝野之所崇重尊卑之所欽仰也是以
禅定大王率鄒牧而詣社壇凝潔信而仰霊
威先称揚大乗之真文代法味於蘋蘩之露
次修行秘密之軌則和梵讃於松柏之嵐加之
殊書写一巻之秘典以奉貢三所之神威今此般若理
趣(経)者説如来真実之自證顕妙有不空之極
理十七曼荼之旁分也花香雲之位歴々無尽荘
厳之広構也半満月之餝玲々至如夫読誦書写
之獲勝利思惟修習之招大果功徳不知辺際同
申供養於諸如来悉地無待多劫早期証悟於十
六生仰願当所権現諸眷属等増現法楽添大威光
然則鳳沼水浄尊神如浮感応之影藜祠
風和大王速預寿福之□(?)
　　殷富門院被修故御室御忌日理趣三昧表白
夫理趣三昧行法者證得菩薩之直路速疾
頓悟之観門也他化天宮所宣之妙理深顕自

└22ウ

└23オ

證之底一十七臨開演之儀則忝被濁乱之今
三毒無戯論則是自性清浄之功徳也四惑非染
行仰亦果地最勝之法門也受持読誦其福豈
《令》(ヤ)爰禅定仙院当二品聖霊遷化之日修三
密瑜伽甚深之法非唯眤同胞(ハウ)之昔儀以兼有
師資之深契観夫。〈仙洞〉累秋風月老而独懐古仏
閣積歳忌辰来而弥抽誠精勤既勲勝利何
空然則聖霊秘蔵開扃(トホソヲ)早列曼荼之聖衆
心殿払塵速顕常住之尊位

六条局阿弥陀三昧開白

夫以法蔵沙門之立願海也能納一念之消露
弥陀善逝之設浄土也無蔺十悪之瓦礫有
情之人誰不帰乎是以信心大施主嘔六口之苾蒭
限三日之光陰修蓮花部主之密法致念仏
常行之精勤論浄穢於東西十方億土之山
川雖阻(タツ)尋覚悟於性得三千七尊之心城非他
何唯九品之教王矣即是一心之本仏也勤行

」
23ウ

旨趣蓋以在斯以所生善根先資双親之
菩薩分功徳餘薫救六趣之群類殊則大

└24オ

施主感花報於娑婆久保百二十之算契実
証於安養終至十号之位敬白

殷富門院故御室御忌日被修阿弥陀三昧

夫以煙霞無跡雖障蘭陵竹園之風涼燠属後
更迎仲秋下弦之月悲感之腸此時難休者歟
是以禅定仙院依忍連枝之芳契懇致善根之
追報勤修已懇懃聖衆定随喜伏惟聖霊久
為仏家之棟梁兼長百家之材深究法流之
渕源剰討九流之波霊徳被君臣仁義遍動
殖泊夫維嶺雲新平台月傾仙院之水石

└24ウ

永咽孤墳之松柏獨醒仍展連月之斎席殊
専今日之精勤者也方今弥陀三昧行法者観
自在三所證之法門濁世衆生出離之要行初
仮三密相応之方便驚法界宮之衆生後誦

七日専修之経文備極楽界之正因内證外用
妙具権門実乗無闕依之聖霊運誠於十甘
露之明呪證心於九品刹之荘厳観念古窓歳
月積而宿執惟深追福今莚香花新而祈願
尤切定知弘誓舟疾捨苦海入願海覚悟蓮
開自下品至上品兼又仙院茅洞道砌之間白鶴

└25オ

献齢帰仏信法之中金人垂応
　　殷富門院阿弥陀三昧開白
夫以恵日之消衆罪也甚於薄氷之当朝日
法雨之生善根也猶如茂林之過春雨滅罪生
善誰不欣哉是以禅定仙院就瑜伽密教之
軌儀臨西方無量寿之行法苾蒭列六口各抽
匪石匪席之至誠矣光陰契七日便是仲秋仲
旬之良辰也今此勤行者妙観旨深道場即改
法界弘願縁厚往生尚欣安養因茲先致三部
深秘之加持驚已心理性之本仏次誦六方證

└25ウ

明之真文仰浄刹事成之教主躰用無闕功
德宜大然則仙院暁霜夕露比消滅於無始之障
碍春花秋菓類感果於現当之宿望兼又
善根不限利益広覃数箇恩所各離三有
之輪転六趣舎識併預一善之餘薫敬白

同結願

夫弥陀如来者果徳内備雖居八葉之内位矣
慈悲外顕早儲九品之事土焉尋本則密教
之浄刹浮影像於十万億土之西論実亦法
身之如来示尊特於百宝蓮台之上臨此瑜
伽之密行欣彼安養之引接観念旨深弘願
何空然則仙院花報先感保鶴齢於万歳之間
宿望終遂顕烏瑟於千秋之後兼又両院聖霊
同並妙覚之座同胞幽儀兮遊無為之宮

八条院普賢供養表白

今禅定仙院凝丹誠於一心調白善於三業修複
大慈大悲普賢薩埵之聖容図絵二聖二天羅

」26オ

刹十女之尊像肆香花之梵莚啓仏陀之境界
旨趣何者仙洞之中有一尊像造立非聊(レウ)爾恭
敬尤慇懃其躰非木非石便是母儀仙院平

生之手書也其誠夜礼昼礼専憑懺悔教
主広大之誓。慣丁蘭刻木之志仰白玉於晨昏
欣孟宗抽筍之感捧紅花於朝暮爰頃年
回禄致妖欒巴先術尊像僅雖免煙炎荘厳
尽成灰。〈燼〉悲而送日歎而積歳今新造六牙之白
象奉乗之営一基之厨子奉安之厨子四方
奉図薬王勇施多聞持国十羅刹女之形像蓋
以法花守護之誓同為大士影向之助伴者也御願
旨趣大概如斯菩薩功能天等内證併化密言之
加持莫労啞羊之称讃一顆之摩尼恣雨衆(宝)

微渧之醍醐能除諸病真言功能亦後如是願
依一座之行法早備無辺之功徳以所生功徳先
奉廻向禅定聖霊速牽広大之誓願忽

└26ウ

└27オ

到究竟之果位次則禅定仙院滅罪生善宝
寿長遠消滅無始之罪碍同薄氷之向日増長
宿世之善根類茂草之遇春茅（ハウ）洞霞中久
萌（キサシ）菩提之種茨（シ）山雲底長成功徳之林
　　殷富門院地蔵供養
夫以諸仏菩薩之利生或利現世或利当世大悲方
便之益物不嫌重罪不論重障伏惟地蔵菩薩

」27ウ

者発無仏世済生之願備五濁乱能化之力称
名功大遙過倶胝劫之讃揚抜苦益速広施
恒沙定之神変二仏中間之人誰不帰敬哉
是以禅定仙院久発千躰造立之御願深□
一心清浄之至誠其功漸積其願欲満今撰吉
曜良辰旦奉開眼廿躰之聖容伏願大士知
見納受然則仙院早成二世之素願保百廻
之年算終遂九品之宿望広導三有之群
類報四恩徳施無遮益敬白
　　八條院御逆修結願表白

」28オ

夫以信心水浄々則浮真如之月善根山高々則
挿法性之空感応得不可称伏惟禅定仙院
七十年中飽蓄仏道之資粮万億国西久
萌浄土之業因或儲事相之施供播善根於敬
田悲田或積理観之薫修致勤行於三時四時
洞裏鳥馴(シユン)屡(ナレテ)作閑居泰適之友堂上僧列鎮
為滅罪生善之客禅窓累春之花飜覚分荘
厳之粧密壇迎秋之水湛五智清浄之流前聞
尚稀矣況於当時乎然今受肆七箇日之
斎莚深求三菩提之妙果覚路弥促数駅

28ウ

之程徳海方添一流之勢者歟観夫初則
尺迦善逝恣称揚於頭露之詞終亦大聖明
王専行法於秘密之儀定知常在不毀之月
分光於瑶池之底法界加持之風通響於金
屋之裏三宝證明諸天随喜指掌可知金眼
可信抑五時之真文三部之秘典今已調巻

軸権実之聖衆説半満之教迹終欲遂繕（セン）（ムシル）（ツクロウ）
写願念因於荊（ケイ）巌（ヲトロ）之石浄。〈心〉潔於藍渓之水
蓋厭朝露夕電之世致勇猛精進之勤之

」29オ

故也自彼両院同従衆下之波二陵□長墳
上（泉）之松以来弥催駿馬驚鞭之志深成痩（シウ）
鳫出籠之計況於同胞列親之告別乎寧
玉鬢雪面波之来身哉屠羊望肆之間轍（テツ）
魚待水之程可致精勤何惜身命御願旨
趣取要在之所生善根廻向区分聖主。〈上〉皇
一品公主共保南山不騫之寿双親両院骨。〈肉〉
同胞皆詣西刹有縁之境重請禅定仙院仙
算添数聖躰無患保百二十年之遐算遂五
千餘巻之書写乃至法界利不限

」29ウ

卿三位局中山堂供養誦経導師表白（大阿闍梨御室）

夫伽藍之興其矣遐哉源起十力無上西天成
覚之場流及三品殿下東郊種始之砌慣来

数百万里相続二千餘年実是最上之上福
広大之大善者歟観夫顕満月瑩尊容光
褊秋宵之三五当定星恕供養席列陳隋
之《厭》(龍)虎至必夫上皇之垂臨幸仙院之助威儀
紺殿新成暫宿長生殿之月寺門胎排方扇
尭母門之嵐事絶常篇例希曩代方今捧法

」30オ

薬増聖寿不奈玉壺金壺之味唱梵讃驚
叡聞誰求梨園杏園之曲何唯施主之豊
寿福而已可楽庶民之誇稼穡者也抑八相成
道之昔儀屡致三女四輩之障難一乗開演之時
尚仰金身坐禅之證明今日之善根無此事
仍叩九乳而驚海会之聖衆凝一心而払彼
句之邪党諷誦之趣蓋以如斯

中納言三位局中陰法事供養小堂表白

夫以方士霊山之薬未治生者必死之疾長房縮
地之術何駐常在不壊之齢無常之理誰敢遮

」30ウ

之者乎伏惟三品尊霊生累葉繁花之家
。四徳六行之誉伴貞操於松竹無後其節争
廉潔於氷雪不変其志仙院為之垂恩顧朝家
為之授微号至必夫万乗之国母同胞九重之
聖主為親甥誰謂之庸流天津之餘浪通洞
誰謂之凡種帝梧之末枝央蔭然間去秋以還
寝晤乖例邪竇之夜雲難霽薤瓏之朝
露欲滅葛氏一百方施而少験蘭家二千巻訪
而先治遂則三秋之暮月下旬之五日一期運
窮九原駕催当斯時也落花髪携木叉心

」31オ

提菩薩之大戒凝一心合両掌口唱弥陀之宝号
専念不乱善諧二経教之所説威儀寂静宛同
伝記之所録矣彩宝花繽紛当眼五宮綿索。〈連綿在掌決定往生何其疑乎何況臥病之後〉閉
眼之前修慇懃之善根企鄭重之福業定出宿
習内催善縁外索動長遠之仏道開速疾之
覚路方今大暮之別永隔中陰之忌既盈爰
信心女大施主受彼芳命修斯追福締花堂於

蘭若之雲瑩金容於西郊之月促(チカツイテ)軒(ケン)。騎(キ)憖供
養之軌儀餝幡蓋添道場之荘厳懇疑誠

└31ウ

深不奈蒼溟万仭之波報恩志切泣祈金刹
九品之台然則尊霊不滞(トヽコホラ)輪転無際之郷速
到究竟安楽之国嗟呼昔浴聖主恵沢之恩
賞忝三品崇斑之号今嘗(ナム)覚王甘露之法味(シヤウ)
養五部法身之膚蓬宮花下雖悲零落於無
常之風蓮台月前早耀智光於畢竟之空
兼又如大施主翠髪不改争貞松百尺之翠紅
顔無衰類仙桃三千之紅次則伽藍安穏興隆
仏事常燈光明与日月久挑焼香薫修伴煙
霞無絶

└32オ

。　仁隆法印法事墓堂供養表白

夫以露往霜来万物蹉跎而色早衰自春至夏
四時代謝而景不駐(トヽマ)無常之理此時易覚者歟伏
惟前法印大和尚位権大僧都去冬窮臘風水告変

今春上月荒原送駕以来孤墳之孤峙(ソハタツ)也松
柏之影漸茂遺弟之遺悲也。薛蘿(ヘイラ)(コケコケ)。之袂(ソテ)無
乾一周之忌景既欲来九品之覚果何緩誠是
以法眼和尚位以下一門禅徒同力合志造営当宇
彫刻尊像展供仏之莚致施僧之儲伏惟尊霊
者密家之棟梁釈門之開鑰也早応鳳衙之

」32ウ

詔命忝賜紫崇斑之階位速為龍象之上首
加三密一宗之官長修練無倦専精勤於中丹
効験被世通感応於上玄一国之重宝也民戸
依之豊九穀之貯四輩之導師也群類帰之
入両部之壇凡厥真宗之奥旨秘密之肝要莫
不究之莫不達之惜哉恵燈忽滅久不照長夜之
昏闇恨哉法水流竭永不潤濁世之枯(コ)(カル)。槁(カウ)(カル)爰
法眼和尚位稟同胞(マヽ)之遺體蒙慇懃之顧命早
致中陰之勤亦営今日之善新墳松下雲楣(ヒ)。
霞軒(ケン)〈。之構速成宝座蓮上万字千(輪)之像

」33オ

忽顕可謂速疾之大功無双之勝善者歟然則
尊霊依金剛乗之薫修従凡身入仏位牽蓮
花部之聖衆捨穢土到浄刹先往安楽国蒙
龍猛大士之指授□(?)詣知足天預高祖遍照之
引接宿習之開深悟自心成仏之理自行早満
云歟
剰《起》(趣歟)化度利生之道重請伽藍基堅無風
雨水火之相侵尊像貌静致昼夜朝暮之勤
行次則法眼和尚位以下一門禅徒久守遺跡共保
百千歳之算必結芳縁終為一仏土之友

宜秋門院母儀北政所中陰被修臨時善表白

夫以秋霜降古墓千年松柏之緑遂朽春風
払新墳一聚虚空之塵何留新古雖異(無)
常誰同者歟伏惟前禅定二品大夫人女誠無
違比賢名於梁氏〈之〉妻婦範克調掌巾櫛於
漢霍之家長松帯蘿而年漸久瑶琴和瑟而
月多累男則忝丞相之位女亦厳仙院之号栄
幸不恥人徳望普被物然間携湯薬僅九日

└33ウ

訪医療未満旬荒原之駕忽催泉壌之跡速
開爰禅定仙院深悲慈顔之早隠方溺愁〈鞄〉
涙之俄湛釈尊遂苦中夜之別改知必滅之
不免一人倫或全百年之算尚恨孝敬之未失
羅帳空ク紗燈幽ナリ向旧寝而断腸玄冬暮
春律ノ来ル展焚莚而稽首ス悲深レハ誠則深シ恩
重レハ志亦重シ是以三五七之良因精勤早ク過キ四十
九之恵業講会未重不堪一日三秋之追□
企臨時底露之勝善云仏云経其趣懇切或以
先人之遺髪繡(スイテ)種子(シク)或銷尊霊之服玩為

」34オ

仏像翠髪之昔粧転成法曼荼之躰白銀之
古餝変為妙相好之尊加之尊霊平生之時在
世之日屡通書札以同安否筆跡空残留箱中
点画徒欲朽涙底仍蔵恩愛之詞写妙経之
真文綴妄想之語顕実相之能詮御願既巧
勝利何空然則尊霊不出生死證涅槃如変魚為

」34ウ

龍不捨凡身登受位同瑩石得玉抑仙院早
追波提之遺跡戴木叉於頂上深厭泡漂之浮
世守草繫於心裏弃恩入無為昔改傷悲母

└35オ

慈愛之芳情出俗帰真際今則悦真実報
謝之本懐願廻出家受戒之勝業以資浄土
値遇之良因御願旨趣蓋以如斯

高三位入道秦経五七日表白

夫以颯々風前九枝之燈難挑漫々浪上一葉之
舟易覆人之在世同彼燈舟雖知常理尚有難忍
伏惟禅定三品尊霊忠真稟性廉潔守志奉
公而無意交人而多誠是以姑射山之雲底近龍
顔而多年紛陽県之水辺衙鳳詔而幾日人望

└35ウ

不乖于世論君恩専深為身上遂昇三品之
斑剰為一省之卿朝露未消之間多貯幽途之
資夕陽影斜之時早受釈門之侶不残恨於世
上不留執於人間卜西郊之幽墟締梵字辞《□》(東)

路之喧(クワンチウ)。囂。栖禅室然間一期之運命有限五
陰之身躰不久冬上月之下旬慈顔早掩芳
骨空毀爰女大施主三品殿下久養慈悲之懐
鍾愛勝他頻馴眷顧之裾撫育超人自羅帳
秘《媛》(妖)艶之質桃李之姿漸媚至餘窓愁配偶之

」36オ

礼松蘿之契不変思其重恩計彼原□徳二
算之峯尚早七葉之波遠浅今遭窀穸(アフトムセキ)(チム)(之)
別深摧恋慕之腸泣迎五七之忌景敬展酬
呑之斎莚者也仏像経巻所崇者尊霊往年之
図写也拭涙穿掌所加者施主今日之新功矣
三宝納受諸天随喜素願忽満丹誠不空然則
尊霊無明之長眠早驚速起八正之路有為之巨
夢忽覚定登九品之台栄爵松高昔忝三
品之位頓悟蓮開今為十号之尊
。　権中納言宗隆没後供養一品経表白

」36ウ

夫以林花芬郁之粧、飄(ヘウ)(ヘシカセ)。風　吹而忽散夜月玲瓏

之輝重雲聳(ソヒケテ)而俄隠無常之甚不耐(タイ)愁憤者歟
伏惟故異門侍郎尊霊栄望被世官斑軼(スキ)人
早歩累葉之跡久誇繁花之運伏青琿超丹
墀屡従王事之靡監経蘭台登棘路幾伝
父祖之餘慶年齢僅過強仕既為皇家一朝之
元老矣材幹広富和漠豈非政化万機之明臣
乎爰暮春三月之天仲旬二日之朝風霧相
侵寝善乖例携湯(薬)而失験結恨於上池之水

祈冥感而少応責(祚)於空谷之響遂則剃首
受禁戒既列釈尊之遺弟合掌唱仙号可謂
仏陀之加被正当閉眼之時受無啓乎之苦正念無
望神去気絶雖喜臨終善死之相難慰(ヤスミ)別離(ナクサミ)
恋慕之悲老母在堂深溺前後相望之涙寡婦
守床幾断一生孤独之腸数子者多幼童也声
々忍昔芳儀旧僕者併失主矣面々懐古傾(眄)
方今返報竭誠已巻七个度之斎席居諸如馳更
迎一百日之光陰仍合力円志彰十種願王之尊容

└37オ

写二十八品之真文重期済度於黄泉弥祈往生於」37ウ
金刹者也普賢満月之光願照生死流転之昏闇
妙法垂露之文必霑輪廻沈没之枯槁然則
尊霊牽不相捨離之誓。〈願〉速越五道之岭岨依
皆成仏道之功能定登九品之宝台有為（果）
報者虚幻也何留餘執於金紫銀青之餝無常
道理者必然也誰貽別恨於生者必滅之境唯
仰仏力欲求亡魂

按察使泰通亡室中陰法事

夫以至女廟之春花猶遺恨於（零）落之色舒姑泉
之秋波更会悲於絃歌之声閻浮沫泡之郷分段生死」38オ
之身誰家得不死之薬何人伝長生之術雖知常
理難耐哀慟過去幽霊生累葉繁花之家備
四徳六行之礼心守霜竹之貞送歳月無撓気韜
露蘭之芳掌巾櫛増匂家有仇儷之親松
蘿之契非浅堂多男女之息鳲鳩之仁非均爰

翠眉漸《□》(?)〈仰〉双蛾之影月老玄鬢暗変孤鶴之
翎霜寒以来倩厭三従之儀無益深顧五旬之
算少残落蒼花以為尼仰紺頂以事仏遂辞花
洛之塵境独栖西山之幽洞窓梅綻風之朝々専希
上品之花台嶺松戦風之夜々唯西方之妓

」38ウ

示何況受三密之秘法仰一乗之真理朝暮之勤
行無懈昼夜之精進弥功爰仲秋之候忽纏
風霧之気下旬之終俄告窀穸別生涯五十
四年猶恨夕陽之難駐涙川四十餘日空悲秋水
之不返当此時也大施主倩憶往事傷嗟焦(コカス)肝(セウ)
昔在小年早契偕老緑蘿之接青松也風霜転
旧玉琴之和琮瑟也音曲能調一事一言于朝于
暮百千万緒之襟懐無隔四千余廻之涼燠久積
然今別路忽催駕荒原俄□〈送〉終雖知必滅之理尚
迷哀慟之悲老而猶遺如鰥魚之先水去而何

」39オ

往似雲雨之無蹤悲涙不乾五旬既満仍餝瑜伽秘

密之壇場以廻頓悟成覚之秘計仏則今時之
精勤也営出悲歎之涙底経是昔日。〈之〉繕写也
書成信心之手功自他合力解脱莫誤然則酬宿
善之薫修早覚一乗之妙理依結縁之深厚速詣
九品之浄刹抑夫婦之契不限一世恋慕之思豈
無再会然而会者定離莫再帰于輪廻之境生
者必滅莫来于分段之郷唯期値遇於九品蓮之
露偏望芳談於七重樹之風

「(仁隆法印中陰法事修善表白在別)」(貼紙)

静賢法印没後四十九日修善表白

夫以有為諸法者幻化也雖住不久住無常道理者必
然也雖長不終長常理之中尚有難忍故法印
大和尚位三春仲月下旬初日一期之運命爰尽
九原之別駕忽催悲哀之至非仏訴誰伏惟尊
霊廉潔稟性信力深心仰三□之福田更無餘念
尽一心之懇府久仕聖明遂則忝崇階於一朝之
渥沢掌機務於数箇之寺院徳望之被物人以

└39ウ

重之賢慮之謀事世以帰之何唯釈門之高徳
乎亦為国家之元老者也爰齢閑八旬病侵五

└40オ

内劫老之方失験終焉之期方至当□時也
遺孤之留室中宛如燕卵之覆巣旧僕
之列堂下各速嗚咽之摧肝就中法眼和尚位鞠
養恩深非唯受身躰髪膚枕席徳重偏致立
身揚名返報謝徳之志砕身不可飽滅罪証覚
之計玉心深欲廻仍迎中陰之三盈泣営今日之
斎莚者也仏則娑婆有縁之仏納一念於願
海経亦大乗十《至》(至)極之経示真至於中道必依媒力法
力之救済速遂順次順生之願望抑大暮告訣
荼蓼之悲未半中陰景満旦夕之勤行欲□

└40ウ

別路隔而弥隔東袋(「岱」の誤字か)之煙何出孤墳幽而又幽
北芒之草漸《漸》滋《蜑》(涙)雨灑砌故園之露方深悲風動
窓旧覆之月独冷恋慕之懐唯仏愍之然
則尊霊輪廻之車早摧方同大行之路流転之舟

速覆亦類巫峡之水化功帰本之故法主増寿福利
益広施之故群類得解脱

八条院被修鳥羽院御月忌表白

夫以軒(轅)皇帝者長生之主也(鼎)湖之雲長 惨(イタム)
釈迦如来者大覚之尊也提河之浪終咽誠知雖聖
賢尚不免無常者也伏惟鳥羽禅定法皇十善之

└41オ

運云窮九品之迎時至以来天津之餘浪皆帰必
滅之理仙院之懇府独抽返報之誠歳々昇霞之期
展斎席於南郊之風月々底露之勤祈覚
路於西刹之月聖霊得脱之計偏在我君之
聖慮者又方今大日如来者居理界智界之中
夫為三部五部之惣体出過心地之自證雖隔見
聞於等覚十地神変加持之方便尚施巨益於凡夫
具伝当斯時也迎本地無相法身之位示首陀会俯
同之形改最高顕広眼蔵之称表曼荼羅諸尊之
号爰知受用変化帰本則無異相忿怒寂静

└41ウ

就未則論差別純色摩尼随物変色一味甘露
遂器改味蓋斯謂歟般若心経演万法皆空之妙
理阿弥陀経説九品浄刹之荘厳普賢観経教(六根)
懺悔之方法無量義経談一法出生之深旨妙法蓮
花経者輪王髻上之明珠良医掌中之妙薬三有
孤独之家得之則雨如来秘蔵之宝二乗亡死之
人嘗之則除自利偏少之疾是以三関声聞
悉知未来成仏之遠近五障竜女忽顕現生證悟
之奇特是皆余経所不説権教所不談依之一句
半偈之結縁悉混実相挙手(低)頭之《□》(最)善皆為
仏因何況供養(演)説誰測其福者乎然則聖
霊妙覚果海之波上隔然常住而無去来常在霊
山之洞中寂静安楽而難消滅

同

夫以魯聖之雅訓十八章専教孝敬之礼牟尼之
金言五千巻殊讃報恩之徳内外同旨誰不励乎
是以禅定仙院迎毎月之今日肆一座之斎席

」42オ

蓋是顧射山之旧徳抽迹石之新誠者也伏惟
大毘盧遮那如来者一大法身之極果万徳□(?)摂之
根本身口意業之遍虚空誰測其辺際内

」42ウ

證随縁之満法界孰漏彼摂化当知牟尼之誕
釈宮施難化能化之巨益弥陀之設浄土垂一念
十念之感応皆是遮那普門之方便毘盧示現之
応用図絵供養之福指掌可知般若弥陀之二経
者諸仏之智母出離之要行普賢無量之両
典者妙経之序分懺悔之指南妙法蓮花経
者開方便門之実語示真実相之正説四千余
年所宣之権教廃筌蹄於昔家二処三会
開演之円乗得魚兎於今時唯仏与仏乃能六丸
尽道場所得之深法也無二無三法界唯有如来

」43オ

甚奥之秘蔵也云仏云経功能如斯若漸若頓
証果何疑然則聖霊自在宮之裏早忝法帝之
号密厳国之間永厳覚王之称抑時属陽

春之佳景節当上月之令辰瑤池氷解水浮
万歳之影玉樹風和枝含千秋之粧地勢尽表
嘉瑞道儀弥添荘厳然則聖霊得脱之御願先
黄梅而早開仙院無彊之宝算。〈争〉翠松而弥久《洞》(洞)
中水石類三壺七万里之波。〈堂〉上梁棟比五城十二楼
之構男官女職《嘆》(嗟)東父西母之齢近習旧労快上
和下暁之儀

└43ウ

同

夫以釈尊当仲春示滅道樹為之墜葉王修迎秋
日哭母隣里為之止祭其月其日不可然正是禅定
仙院毎迎法皇昇霞月朔第二之朝懇修図仏
写経慇懃無双之善勤行歳旧感応何空方
今大日如来者法界唯一之特尊理智不二之
惣体薩埵之万行雖広所帰者則毘盧之妙果
如来之示現雖区尋本則遮那之一身梯航
共達鳳闕之雲江河同宗鼇海之波此尊功能
亦以如斯然則十方諸仏之法身一切衆生之覚性図之

└44オ

一幅之白氈顕之五綵之丹青功能無量利益
甚深者歟般若心経宣諸法之空相空寂阿弥陀経
者説浄土依報正報普賢観経者教懺悔滅罪之
方法無量義経者示疾成菩提之妙行妙法蓮
花経者一代諸教之本懐両部曼荼之肝要記
一切衆生皆成仏道之理即同大悲胎蔵自心成仏之
教後示久遠寿量常住不滅之理豈誰本初不
望金剛界宮之談依之広智三蔵之製儀軌言
遍照如来成道法大恵禅師之演秘旨釈妙蓮
花最深處以此経副此仏理致尤相応者歟然則
聖霊煩悩水清肉団性得之蓮忽開妄執雲留
面善円浄之月早明
　　殷富門院被修上西門院御月忌表白
夫以知恩報恩便是如来誠諦之実説矣有信有
感豈非大聖利物之本誓乎是以禅定仙院毎当
前院昇霞之日勤修懇府底露之善滓為芝

└44ウ

山恒例之勤鎮刷花壇瑜伽之儀仏則西方之教
主仰五濁偏増之益経亦中道之妙理恃一切皆成之

」45オ

旨云彼云此勝利何空方今弥陀如来者〈蓮〉花部之尊
主娑婆界之導師六八超世之願併為忍土之衆生
七日専修之行殊被末世之群類是以経道滅尽之
後独留百年之教跡極重難化之輩尚憑十念之
称名其徳雖多簡要在斯次法花経者一代之
極説両部之肝心釈尊深秘四十余年始顕真実
遮那垂跡九会四重方含其義一如本浄之談何
異中台八葉之蓮花矣常在霊山之説豈非金剛
不壊之本宮哉依之五種修行之功徳方旭算数

」45ウ

之校量四依弘経之薩埵各争如来之付属蓋以
此経其奥方如斯者歟捧所生之功徳併奉資前
院願依月々之祈願早至如々之妙果抑聖霊去
世之後数年之星霜雖積仙院運志之今毎月之
勤修惟新彼北芒雨中古塚畳々化為路傍土

歳々春草生東袋(「岱」の誤字か)風前夜煙漫々昇作半天雲
朝々秋宵空誰家永全返報之謀何人久訪冥
路之旅(依)不退御願聖霊定添餝者歟事為恒例
旨趣不委

同御忌日

」46オ

夫以四恩比山則大華小華之頂尚卑(イヤシ)以徳喩水亦
五葉七葉之底還浅恩徳之至得不可称伏惟
前上西門院聖霊十善流潔久栖湖陽沁水之
月三宮栄彰早遊桝房蘭殿之(風)玉躰飽綺
羅之餝迎春送秋宝宮恣花月之遊朝去夕
来爰倩厭世上之無常深悲泉下之幽闇落花
鬢纏薛服抛蘭麝携木叉以来妙法一乗之
読誦遙満数万余部弥陀三宗之唱念亦及数百万
遍然間練行功績熙連河沙之算数難難及利
生期満娑羅林樹之滅度忽至当此時也禅定仙
院承彼遺託含其顧命始自五旬中陰之御勤

」46ウ

行至于毎年忌辰之御返報偏運慇懃鄭重
之志久修図仏写経之善仏則西方之尊三
代之教主並光経是中道之理一乗之真文列軸加之
弥陀念仏之行一昼夜薫修漸積歳仙院臨幸之
儀毎年毎歳之謝徳尤懃然則聖霊安養浄
刹之花台上添増進仏道之快楽娑婆穢土之
桑梓間施引摂結縁之方便兼又禅定仙院積善
之餘慶久積仙洞之風月契百廻功徳之餘薫広覃
法界之群類蒙巨益敬白

「(先師法印先妣遠忌修善表白在別)
(同在別)」(貼紙)
仁隆法印被修故御室御忌日表白為人作。
今日者前禅定二品法親王辞鳧沼之波隠花蔵之
霞之忌辰也伏惟聖霊賢智在心雖綜諸乗独嗜
真乗練行運誠通達三部究竟五部銀潢波上
深堪金薩写瓶之水西郊月前鎮扇南印伝燈之
風是以一人帰霊徳茅土之封色増戸万邦蒙

」47オ

護持柳塞之煙塵永斂実是吾道之軌範抑
亦四輩之導師者歟方今法印大和尚位久馴蘭陵
竹園之風景懇存時行勝歩之礼儀遂力付法
之上足宛伝密蔵之中心諸尊深秘之瑜伽究源

流於法海二諦真俗之教誡掌開鑰於釈門恩
徳既同山岳報酬何異亀雀依展一日之斎席八
謝多年之厚顧者也方今弥陀如来。〈蓮〉花部之尊主
極楽界之能化本誓則六八願雖十悪兮尚引摂
明呪亦十甘露雖五逆兮能銷滅六方如来之垂證
明露舌相於大千界三国衆生之遂往生碱□業於
九品台凡諸仏成正覚之智如来転法輪之用依（「縁」の誤字か）
之一躰含之三字持念供養難測其福者歟
次般若心経十六会之肝心宣空寂之妙理阿弥陀経

五濁世之目足諸浄土之依正普賢観経法花三
（昧）之行儀教有相無相之懺悔無量義経妙法一
乗之序分宣一法一理之出生妙法蓮花経者

└47ウ

└48オ

一代五十年之本懐両部曼荼羅之簡要初会説
乗□(一)如後示常住於三世尋前段後段之深旨当
理界智界之所詮当躰譬喩之蓮花即是中台
八葉也不毀常在之霊山豈非金剛之一字哉是
以広智三蔵之製儀軌教遍照如来成道法大
恵禅師之採秘韈(サク)述妙法蓮花最深秘専 ⌊48ウ

依此経之功用可添聖霊之法楽者歟然則七重
樹下翫妙法芬荼利之蕚八功徳池上浮心月十
六分之影以積善必有餘慶孝門定招現報
大法主五相観念之窓前千秋之月無傾三時供
養(之)壇上万春之花久鮮

一品内親王孔雀経御読経発願表白(月蝕)

夫大孔雀明王者施威光於十方如赫日之懸碧
漢通感応於一心似朗月之浮青潭給孤園之
中虵毒之患忽殺大雪山之南鳥羅之縛立脱
即是此尊之威力也誰不帰敬是以内親王殿下 ⌊49オ

崛六口之禅侶読三巻之妙典蓋為払妖祥於万
里之外保宝算於千秋之間也方今大陰虧光
満月隠影変異者天之所告也有至徳則攘災
(謹)□者人之所守也帰正法則招福今抽丹心何誤
金言然則常山不騫同花岳千里之基沁水
無濁比黄河一清之色

無品親王瘧病御祈孔雀経御読経表白

夫以蟠龍昇漢陰雲満于九宵之間洪鐘

」49ウ

響豊厳霜和於五更之後感応之道得不可称
伏惟大孔雀明王者去来現在之仏母救苦除厄
之導師威力立顕能劫一日七日之鬼瘧功
能莫測永授百秋千秋之年齢丹祈若能至
心(玄)応如不廻踵是以大王抽慇懃於一心之懇念
憑衛護於三軸之真文蓋為慕給孤園之往
跡期上悉地之成就也伏願三世仏母七仏慈氏
垂哀愍施巨益然則蘭坂(「陵」の誤字か)風塵早払邪竇
之霧竹園月前遙累寿域之春敬白

七条院御出家表白

夫以三学同雖如来之正法律蔵専為遮悪
之根源四輩共雖世尊之弟子出家尚為殖
吾之福田戒光明照則払諸暗於三有之昏
衢法衣広覆亦除衆苦於六趣之貧里広大功徳
誰□信敬是以女院殿下深厭五障之垢穢長受
十重之尺羅蓋為比栄花於蕅芥求解脱於順
次也伏惟仙院天授其徳運開慶於尭母門之風
人帰其仁徳伴誉於貞女峡之波聖主上皇之致
孝敬也茅土之封色添数群卿庶官之専拝

└50オ

└50ウ

趍也芝山之台観加餝栄路云極聖道宜尋
仍追波闍波提之先縦慕羅睺羅母之往路遁俗
網纒緇襟抛佩玉弄戒珠定知誓心決定遙動
六天之魔宮證明無疑普驚十方之仏土昔隋
后之預金台之迎未改三従之姿今仙院落
翠髪永萌十号之因引古擬今誰定優劣者

乎然則練行累日久崇三秘密之教迹懺悔
消(霜)弥増億千歳之恵命乃至法界不限敬白
元(久)二年十一月八日御出家　戒師御室　唄前大僧正延杲
剃手法印承円御猶子儀云々　則自今日被始三七日御懺法僧(八)口云々

」51オ

宣陽門院御出家表白
夫出家善根其矣大哉毀形《出》(而)剃頂髪即是除有
頂地之結便也寄恩而帰真実豈非趣無上道之
正直乎是以一代之教主尽無碍之弁ヲ々〻其徳焉
三世之如来以涅槃之印ヲ々〻斯人ヲ矣彼浄蔵浄眼之
導父也依神変之力改邪見波周波提之倩仏也
代正法之寿蒙聴許難中之難孰不歓哉方今
女院殿下紅顔春濃未極仙洞万歳之娯丹心年深
忽求福田無相之衣抛蘭麝携木叉弥慙妄染之
昔薫改花帳源薛服長染実相之今色実

」51ウ

是希有之発心無双之勝善者歟観夫所排者
法皇練行之遺跡仰照覧於寂滅真如之月所受

者古仏製戒之律儀期護持於尽未来劫之風
金章紫綬之助威儀也各凝随喜之思呉妖。〈越〉艶之
馴陪侍也或拭慈恩之涙事既鄭重福豈唐捐然
則(観)念秋月千廻之影久明懺悔暁霜六情之過
□乃至法界平等利益
元久二年三月十三日御出家　戒師御室　唄前大僧正延杲
剃手宮僧正道―
戒師御布施
織物被物一重　絹裏一　鈍色装束一具　御直垂一
」52オ
御衣一具　御手箱一合　絹裏十
(唄)　被物(一々)　絹裏一　鈍色装束一具
剃手布施令辞退給云々
御自今日被始百ヶ日御懺法長講堂供僧六口云々
若宮御出家表白
夫以茫々愛海之中俗網密而難遁擾々貧里之間
聖財乏而希得慈《以筏》(筏)出遅假衆縁兮方艤戒珠
價重集諸善兮僅翫誠知出家得度誰而尚難者

歟伏惟無品大王稟家於刹利種求道於秘密乗往
因催而遂剃首謝天枝於禅林之露軌儀儼而忽

└52ウ

驚眼移仙洞於戒場之月緇素列座交金紫於
薜蘿之袖軒騎聚門憩驊騮於松杉之蔭彼
浄飯王之思悉達也閉宮闕以致警固妙荘厳
之評二字也感水火以生信解豈如我仙院悦
仏種之不《断》(断)率群卿臨両壇之前愍善根之
早熟辞芝砌幸蕭寺之裏滓之鄭重誰不
(随)喜于時林葉落敷紅錦便是天然之綺
麗也岸菊残貫黄珠豈非露地之荘厳哉
可謂草樹合力風霜同情者歟若然之及法流
於数十代鳳沼之水永潔保寿域於億千載兎

└53オ

園之栖久穏遂則霊効普被自両華迄四荒
護指広覆衛一人済万民乃至法界普皆利
益敬白
建久元年十月十七日甲寅井土無品親王於北院御出家

御年十一　御法名道助
戒師御室　唄権僧正印性
着座僧綱
権僧正印性　法印権大僧都親覚教導
成宝
前権少僧都成賢　法眼寛俊
役人

」53ウ

顕位　宗全　寛済　覚紹　覚全
覚能　道禅
着座公卿
摂政　内大臣忠経　前大納言信清
二条中納言定輔　中宮権大夫師経　源中納言道具
参議隆衡　雅親
(有)院御幸御引出物不空三蔵所持五古　此外北面御所
(被置)銀琵琶金諸□(?)云々　先御幸南院彼御所又被□(?)種々
唐物等云々
普賢延命御修法表白元久三年　三月廿四日

」54オ

夫以瑜伽秘密教之施巨益也宛同摩尼宝珠之
両宝究竟如義語之致感応也甚於輪陀花鏡
之浮影金言在眼誰懐疑滞伏惟普賢延命
(菩薩)者覚位内深便是五智円満之法音也善巧
外顕豈非群品摂化之導師哉三千仏陀入躰身
量最広四大天王仰威翼輔常随称讃之處多
饒益帰敬之者熱欣求功用不測言説難覃爰
太上皇卜仙居而縦逸遊侮民戸而垂寛仁皇明
之被寓内朗尭曦舜日之光徳音之給朝端
伝途歌色頂之声非啻穆々之淳化兼後

崇円々之真理方今天象告異星躔改廃
仍修秘法式致請祈妖無勝徳故昔消守心之
変善能劫邪故今専抽信之勤誠既慇懃福
豈唐捐然則芝砌風静奏慶雲五色之霊
瑞茅洞塵殽契春風千廻之遐期凡厥始自
千官百寮之家及于九州万邦之黎元攘

└54ウ

災孽於未兆受快楽於無窮乃至法界普預善
根

五大虚空法表白 建永二年十一月十七日

五大虚空蔵菩薩者諸部之尊主群類之導師也

」55オ

一大法身矣表一円明之月輪五方如来焉並五□(?)
菩薩之花座遍敬威神之人纔致持念之者無量
之願求悉満如宝珠之懸高憧一切之罪垢忽
消似白雪之向大陽或則払曜宿之障難速
鎮牛漢之妖(ヲウ)或亦得富饒之成就永忘龍洞之
憂思厥魏徳誰得陳説方今太上皇択良
辰於玄冬之半始請祈於丹地之底蓋為消変異
以護皇家致豊稔以安民戸善言尚劫邪況於
覚王密語之功用哉法力能招福宜同尭帝無
為之嚢古矣然則蓬莱洞花裏徳風而春

」55ウ

久藐姑山月添清景而秋静白麟赤(鳥)之歌
屡聆於十二衢之間嘉禾瑞麦之祥遙聞於

鳳凰城之外乃々穆々之化遍及蠢々之類

愛染明王法表白元久二年三月廿一日

夫愛染明王者大悲方便之示現威力自在之薩
埵也名之金剛王頂中最勝之名也号之諸仏
(母)無上特尊之号也是以持念則応丹祈何異龍
頷(之)珠頂戴亦満素願宛如王髻之宝蓮花瓶之
御〈吐〉談〈諸〉弥陀万類而無尽熾盛輪之耀盛焰通十方
(而)利物凡厥功能不可得称伏惟太上天皇難啓

」56オ

帝業出十善之運早遁神器於万乗之位姑
峯雲静恣仙遊而追脱屣(分)水浪清仰仏乗而
抽叡襟方今修敬愛之秘法仰速疾之霊応
明燈之光連壇省夜星之聚頴川焼香之匂
薫室褊春花之綻上苑何況動尊儀臨密場
遠嘲周稗之遠遊凝聖信祈悉地偸慕唐
尭之至徳慇懃誠深衛護何疑然則芝砌水
色添徳沢而久澄茅洞月影与聖明而不傾凡厥
一天之下四海之中世属無為人誇有截敬白(セウキル)

同元久三年閏七月廿六日

夫愛染明王者瑜伽瑜儀甚(深)之特尊大慈
大悲方便之化用大地寂然雖泯衆相於法界之
一宮応迹莫測広施巨益於加持之十方是以
速消国土之災甚於春氷之当朝陽能払悪
心之衆喩之疾風之被重霧凡厥功能
得不可称爰太上天皇銘懇府凝叡誠建密
壇修秘法蓋為平煙塵於万里之外安民廃於九
州之間方今干戈(タテホコホコ)頻動夷(ニヒス)路不静雖観之略
之決勝尚恐餘狭之成凶伏願本尊界会必垂

」56ウ

」57オ

加持護念然則瑶池水清浮(垂)□無為之影(姑)
山風和報理世安楽之音乃至六跡之蛮悉□九
禁之闕敬白

千手法表白建永元年五月一日

千手観自在尊者娑婆有縁之薩埵等覚無垢之
大士千手千眼之相備導狂迷照癡暗焉大慈大

悲之遍覃与諸衆拔衆苦矣懃瑜伽之軌儀則
三障四魔之妨立除念惣持之文句則一宿五
遍之力尤大最勝功能誰敢得称是以上皇当

」57ウ

斯良辰修彼密法蓋所以抽疑心之匪石仰
弘誓之如海也方今聖運歳久仁徳日新憑法
力増信故餝壇場於蘭若之月仰神威抽誠《枚》(放)
陵山川於藂詞之《月》(雲)御願慇懃誰疑衛護然
則丹祈不空増仙算於金殿玄応《潜》(替)通加霊
脱(ヲクル)於玉躰乃至法界併預巨益敬　潜(ヒソカニ)

」58オ

「辰六

海恵僧都表白集下

」(〈原表紙〉扉)

(白紙)

」(見返し)

願書啓白　若宮御瘧病之時勤之

夫以法力之払魔障也甚於廻飈(ヘウ)之揚(アタル)塵仏
威之消衰厄也過于赫日之照氷是ニ大王仰
三宝之境界発二ヶ之大願浄信水清可
以浮威応之影願望海深誰得測誠心之
底唯任仏眼之照鑒欲除貴躰之患累然
則棣花増粧久契一万年之光陰椿葉譲
齢遙計八千歳之春秋

或所蓮花会導師表白為人作

」1オ

方今一夏之安居過半九旬之勤行欲終
当院之中。〈有〉二法会餝壇場而列僧折芙
蓉而供仏号之蓮花会誠有所以哉観夫
白薬赤薬之田々挿銅瓶而耀肉眼濃艶濃
粧之爛々鳴金磬而悦聖心昔釈迦菩薩之
捧五茎也燃燈之授記在眼可見今諸徳
大衆之献数葉也仏陀之納受指掌可知以古。〈比〉
今誰敢生疑以所修恵業先奉祈法印大和尚位
恵命尽未来際梵福満恒砂界次則伽藍

」1ウ

繁昌諸徳安穏九十箇日夜勤行之勝利同
案達羅国千輩之凡僧億載僧祇劫常住之
法侶斎那爛陀寺万口之浄衆

毗沙門講表白 為人作

夫以安不忌危則是君子之用心也至誠必答豈
非仏天之悲誓乎是以信心大施主毎迎白月第三之
朝懇抽丹誠無二之志仰多聞大天之護持廻
譲災招福之方便夫此天者為仏法之外護餝
梵行之内徳若致一瞻一礼忽致吉祥若専帰

敬帰依又専福禄感応不空如当《以其》(笠)畢待化
両勝利無類似下春種収秋実彼遍覚忘身現
身容於流沙月之広智凝念垂霊応於安城之
雲是皆助尺尊慈父之化道救遺教弟子之厄
難之故也今既帰如来之正法何不蒙大天之擁護
然則薬叉衛護千倶胝之数無闕衰患永絶百由
旬之内鎮静

└ 2オ

聖徳太子影供祭文

維元久三年歳次丙寅正月遣寅廿九日辛亥沙門ム
謹捧疎薄之奠敬献上宮聖王之霊惟太子

本地位高雖朗光於円満之月化道誓深尚浮影
於穢濁之水截邪林示正路群類依之帰真託王家
佐政途庶民至今受賚（タマモノヲ）憲章十七箇條玉文照而
被物遷化六百餘歳銅輪耀而表異凡厥徳行不可
揚尽仍低信敬深固之首以礼童稚二八之像蓮
眼以瞬省向丁家之彫刻花容如咲還褊甘泉之画
図忽催不覚之涙弥増難耐（タイ）之感方今聖擲留窟
投歩者或得見微言銘石聞誠者皆除疑何唯子
晋維嶺之雲底後人立祠羊公現山之月前行容
霑裳而已哉伏惟衡岳救会龍之幽魂河州一廟之

尊霊鑒吾素願文此尚響

大乗講表白大進公

夫転禍為福之勤不如講経之妙果令法久住之計

2ウ

3オ

専在論談之善巧是以禅定大王当瑜伽観念之
餘暇肆義理決択之法莚則是毎月恒例之御願
抑亦永代不朽之斎席也方今講法性制底之真
文増天神地祇之法楽談三世実有之妙理祈万歳
千秋之宝算然則法躰無恙(ツヽカ)久保金剛不壊之名
恵命不尽鎮崇鐵塔真乗之教乃至法界平等
利益

」3ウ

同 大輔君

夫以十力之世尊転法輪於波羅底斯之風五百之
応真集広説於迦涅弥羅之月以来四聖諦之法
広布十六大国之中一切有之宗遙至数百万里之
外諸□(?)之元初誰不学哉是以禅定大王観念窓
前暫停三密之妙行瑜伽壇傍属肆一座之
講席事為恒規敢不失墜方今講修多羅之真
文備天衆之法楽決阿毗曇之性相増学徒之
鑽仰実是興法利生之方便抑立攘(シヤウ)災招(セウ)福之
御願也欲色無色之諸天霊(雲)集護玉躰自界他界

」4オ

之賢聖星烈照丹心然則禅定大王恵命無彊
勝齊単越之無中爰宝算久保類阿羅漢之留
寿行

鎮守講表白 大輔君

夫以慈悲被初講之仏陰陽莫測日之神仏与神
誰不帰敬乎伏惟当所鎮守九所大明神本地非高
内秘示覚妙覚之位垂迹又貴外護瑜伽瑜祇之教
被其潛(セン)衛之輩何点報賽(ケン)之誠是以箸般若皆空
之法味替蘋蘩之礼奠　捧(カヘリマウシ)　大乗究竟之明鏡餝
枌楡之社壇神徳依之弥馨仏教依之再昌然
則禅定大王蘭陵朝風久呼万歳之声竹園夕
露弥潔千秋之色以亦一院諸徳鑽仰無倦争
鱗飛於龍門之浪才名早彰仰採択於兎園之
雲事為恒例不能為委

同 備州

夫以大慈大悲之尊成道雖旧一陰一陽之神感応

」4ウ

惟新雖仰内證誰忘外護是以排九所之霊社
肆一座之講席事為毎月勤送多歳方今
所講者万法皆空之真文蕩妄執於藂祠之
風所談者三世実有之妙理増法楽於花台之

」5オ

月然則潛衛（サンエイ）日新契千秋於竹園鑽仰年
久保万歳於松門乃至法界平等利益

会中講表白大進公

夫以鸞鏡写像待百練之琢（サキタク）磨龍泉断物貴
一割（カツ）於砥礪殊神励性取喩如此伏惟伝法大会
者点時於春秋之二季兼学於顕密之両教一院
諸徳競鱗飛於龍門之波満堂宏才待採択
於兎園之風方今暨于五旬之論談巻筵一季
之大会欲修演一座之講席叩三問之疑開

」5ウ

所講者鷲王之秘蔵専讃歎於本迹之二門
所談者龍樹之所製採奥義於前後之両重
以勧稽古之勤労以祈寺院之安穏然則仰園

之秋月告大王万歳之声松門夜之月添満寺
繁昌之影乃至法界平等利益

明遍僧都奉造立阿弥陀像御身中奉納願文

弟子某帰命稽首而白仏言夫十方仏土之中易
往者安養之浄刹一代教迹之裏可憑者弥
陀之本誓凡愚之十悪尚垂引摂於南無之

└6オ

称名散心之一念蓋繫願望於下品之蓮台
是以弟子早抛一生之名利類浮世於薤壠
之露深悲億劫之輪廻凝観念於花池之
浪雖然無始之妄心数索専修之行業易乱
有相之迷執尚残順次之往生難期若雖仰
大聖之加被争得遂中心之懇懐仍造立弥
陀三尺之聖容以擬最後十念之本尊昔刻。コク
木拝貌之志流血於六府之中今刻木礼像之
誠低頭於両足之下彼者恩愛之悲母也神魄

└6ウ

暫来而表霊此者大覚之慈父也悲願不誤而垂

応凡霊尚盛精誠聖心蓋照丹襟抑起崇台
者非一幹之材成洪績者用群賢之議況
往生極楽之大行何限独身之微功仍勧諸
人致念仏勒彼称名之遍数納此尊像之身
中願以共業同到宝刹但業因有遅疾罪
障異軽重若先詣彼国之人如垂最初之引
摂若尚留此界之輩深憑結縁之不朽一生之
望懇切在斯三業之勤廻向無他仰願弥陀□
覚伏乞観音勢至不誤摂取不捨之誓願尊
忘最後臨修之来迎敬白

或女房奉納護中願文

女弟子佐伯氏低頭合掌白仏而言仏能利生導
十方之含識而無蔕人不自安蒙三宝之冥助而脱
〈苦〉昔就中誓願甚深者大悲観世音菩薩功能莫
大者一乗妙法蓮花経三称名号重苦忽除一
聞真文成仏不疑弟子受五障之垢穢纒八
苦之重累身沈孤独之歎心拙因果之理短

└7オ

宵夢中名利之望難休長夜睡(「暗」の誤字か)間覚悟之　」7ウ

計何在仍彫刻千尓(「手」の誤字か)千眼之尊像繕写一乗一
如之妙典捧之掌中抽誠諦一心之懇篤作
之眼前為現当二世之導師伏乞百年之間無
窮貧孤独之愁一生之中離短命夭死之
畏設雖為水火之所焚漂設雖王賊之所逼
悩蒙大悲之擁護得身心之安穏設雖有難
転之業障設雖有深重之煩悩依妙法之功
力獲速疾之解脱願力保因猶如泰山之盤厚
地感応不虚如同碧水之浮漢月仰願十方　」8オ

三世正等覚者八万十二権実聖教三賢十地大菩薩
衆四双八輩諸声聞僧四禅四空梵王釈王天
神地神冥官冥衆照斯丹誠以垂玄覧然則朝
露未滅之間払妖孽(イエウ)致福祚暮煙遙昇之
程離苦域詣浄刹乃至法界平等利益敬白

叡山千本卒都婆供養願文

敬白

奉造立五輪卒都婆一千本

奉書写妙法蓮華経一百部

」8ウ

右造立書写其意云何夫五輪之妙相者法界
円極之惣躰一乗之真理者諸乗究竟之所
帰也有情之輩誰不造写是以往昔有一上人
其名号阿古耶者叡山獄之大嵩立千本之五輪
人倫之往遠自成瞻礼之善根禽獣之馴近多
萠了因之仏種爰歳月推遷基跡頽毀(タイクキ)其名
僅留其実不残弟子夢想文中頻蒙山王之告
心府之底深発造立之願依之広勧十方之知識
已遂一心之素(?)《□》(懐)千本百部之功積送多歳而□

」9オ

成供養演説之軌儀迎一日而克懃偏是七社
権現之加被也抑亦四輩結縁之芳意乎枌
楡之社壇弥添妙法蓮花之餝蘋蘩之礼奠
鎮加無上醍醐之味次分景福資諸檀那二世之

求願遠満甚於溟海之潮一期之寿算長久同
於孤巌之松抑弟子身頭居家心如出俗五戒護
禁九年于茲忘寝忘命唯祈宿願之成就
尽力尽誠無顧世路之資貯(チヨ)伏請両所三聖如
垂加被然則百年之寿福感花報於娑婆九品之

└9ウ

往生期実証於安養乃至法界皆蒙神眷敬白

元久元《年》(年)七月卅日弟子王丹貞吉敬白

有上人書写供養大般若経願文

仏子(某)敬白仏言夫大般若経者諸仏能生之智母
群類得度之導師泯万法於皆空如河流帰海
蕩妄想於真理似氷解成水出離要道捨之何
求是以仏子往日偸発弘願五趣四生之中幸得人
身八万十二之間適遇此経争写十六会之真文以
資三菩提之妙因仍運懇誠敬企微功歳去歳

└10オ

来独穿拙掌一点一画無仮他力手自奉書
写大般若経六百巻択吉曜良辰遂開題供

養投寸歩而不止遂届千里覆一簣而無怠亦成
高山斯言誠哉伏請尺迦大師十六善神證明
此誠随喜此善以所生善業資法界衆生現当所
願悉令満足殊則仏子滅罪生善攘災招福
兼亦父母師長両祖兄弟惣十一人之幽霊皆離苦
域同到浄刹抑仏子一鉢空而春日遅三衣破而秋
夜長雖腐兎毫難得奥綱仍勧一万人之道俗

」10ウ

以成六百軸之料紙今分無量之勝福資彼有
縁之徒衆於戯昔常啼之求此経遇曇無竭
兮受指海矣今仏子之写斯典因善知識而
遂心願焉彼者法身之大士也早悟実相之無
生此者薄地之凡夫也只思結縁之酬答丹
疑之至白毫照之敬白

高倉局自筆経供養願文

夫以夕陽蔵光更待朝陽於東嶺之霞前仏不
滅唯仰後仏於上天之雲是以三峯合而終混迦

」11オ

葉入定之跡長存一窟閉而無開請弁留身
之栖可尋上聖既契第十減之初下愚尽
期一増劫之後弟子受生濁乱感報垢穢毎聞
鶩子之難結泣憑鶩王之威徳仍為現身発
菩提心順次生都率宮砕黄金染紺紙手自奉書
写妙法蓮花経一部八巻開経結経各一巻墨字
弥勒上生下生成仏爾経三巻般若心経一巻此
内於般若心経者毎書一字起致三礼即捧金
墨両字之妙典遙詣石像五大之霊崛揚首

先捧功徳専資二恩次分餘薫普及一切之八
欲四洲之女人転女成男三界五道之凡夫捨凡
帰聖嗟呼教迩難聞喜結縁於亀木之一
遇善因無摂俟得脱於龍花之三会如遂
金刹知足之望莫《遺》(遺)宝山空手之悔但妄染
大習誓願力微縦不出生老病死之有輪尚無
忘開示悟入之八軸懇誠之至唯仏照之敬白

同人修八講願文

」11ウ

敬白

奉図絵尺迦牟尼如来形像一鋪
奉書写金字妙法蓮花経一部八巻開結経各一巻
奉摺写法花文句十巻
同疏記十巻
法花玄義十巻
同釈籤十巻
以前仏経章疏等甄録如右伏惟大師釈尊昔
為度衆生々老病死入三界之火宅転五時之
法輪其中殊為出世之本懐正教成仏之直道其唯

└12オ

平等大恵一乗妙典歟是以弟子励五障之拙
掌図万徳之尊容竭独身之微功写十軸之
真文発心雖非清浄敢不為世俗之名利功徳
雖非広大唯廻向菩提之大果重案事情読誦
書写実雖為末代之要行思惟解了尚可資
仏道之正因然女身鄙劣之報恨隔習学於諸

└12ウ

仏之解尺開示悟入之文難弁旨趣於釈尊
之誠説仍為開恵解於当来《姿》(八貞)化導於遠劫
書写諸宗講釈之章疏欲充今生人身之勤

└13オ

行但巻軸甚多人命不定浮生縦終尽大願
期来世其料紙則破弟子之筆跡其仏像亦抽弟
子之筆跡捨妄帰真之思以斯善標之積功求
道之志以此勤為本至ヽ金字妙典者去年初冬之
比詣笠置之霊崛揚首題之名字今春暮律
之候擺有縁之道場展開講之斎席開題
之上更加称揚演説之後重決義理蓋為積薫
修増功徳也弟子垢穢而非法器暗愚而隔生道
毎思此事悲涙霑襟伏願以今生所修之善

└13ウ

根併廻向仏道順次生都率之内院長離女身
日夜聞慈尊之説法速得大日龍花正覚之時
鶏足正定之刻随教王下生閻浮与聖衆未至
故郷乗无碍之神通導有縁之衆生釈迦者

過去之本師也留教法而早帰泥洹弥勒者（塵死也）
当来之導師也契出世而広催結縁如依二師
之救済永離五趣之輪転重請一期末終之前
両眼尚瞬之間在々処々離悪縁時々刻々逢
善友終不廃一乗之読誦必期々三会之値遇乃
」14オ

至法界平等利益敬白
成海法眼熊野詣御明文
敬白
奉鑄顕十二所権現御正躰鏡各一面
奉造立六寸金銅五輪塔三碁
於三所之宝殿各安一碁以三粒之舎利各
籠一塔矣
奉摺写妙法蓮花経一部八巻（在具経等）
阿弥陀経一巻
千手陀羅尼経一巻
」14ウ
本願薬師経一巻

観音経一巻
金剛寿命経一巻
般若心経一巻
奉供　燈明一万燈
御花米
右当山者権化利物之場貴賤礼敬之砌也忝
詣継踵重山之霞不遠願望満足空谷之響
必応爰去春仲月社宇忽成灰燼（クワイミン）今年窮冬（モヱクヒ）
」15オ

祠壇新複基跡早速功成可謂神感弟子仰
冥応而日久憑霊威而年積上棟秋庭向涼風
而運歩遷宮冬砌叩寒氷而抽誠極果本地之
正躰瑩鏡而顕相好一乗湿（シツ）土之真文調軸而
写句偈供以麞牙（カ）挑以蠟（ラウ）柱其外冶（イテ）金銅五（ヤ）
輪之塔婆安白玉三粒之舎利擔而遙渉山川
擎（サヽケテ）而永貫枌楡地水火風形色之相深表六大
無碍之理矣戒定智恵所薫之躰豈非方徳
荘厳之宝哉神鑒明照霊勝必及抑齢邁（ヲトロヘテ）（マイ）
」15ウ

五旬位忝二階涯分可定地望何事然而重奉
増権現之法楽弥欲預現当之勝利然則寿
福有餘無《遺》(遺)恨於世上家門永昌及慶《物》(於ス)身
後重請鳫沼(セウ)水清久抽方円随器之志竹園
風和弥全忠貞無撓之節敬白

建永元年十二月　日法眼和尚位ム敬白

大岡入道五七日願文女子北条妻修之

夫以紅林春艶終有黄落之秋声玄鬢朝粧
誰免白髪之夕眠物之変蓋以如斯伏惟過去

」16オ

幽霊冬初受病冬半告別邪竇夜雲悲風
来兮頻(イタム)惨寿域秋月宿霧侵兮永隠弟子
結交於東海之辺境隔送於北芒之別路前途
幾程馳思於善路之暁霜後会何日消魂於柳
塞之暮雨方今野草忰而馬不進欲訪旧
室有煩墳松幽而鳥孤並雖詣新塚何益仍
隔数百里之煙嵐遠展五七日之斎莚者也
奉図絵尺迦如来再十大弟子等像一鋪奉摺

写妙法蓮花経三部開結阿弥陀般若心等経各三」16ウ

巻位送浄財敬以供養願以匪石之誠必為浄土之
因昔求父骸於碧潭之賢女残貞潔於八宗之
黙今報父恩於黄泉之愚妄抽懇誠於十号之
尊至孝之名雖同報謝之趣遙異者欤然則
幽霊九品蓮上霑裙於空非我之波七重樹下
披襟於常楽浄之風乃至法界平等利益敬白

任性阿闍梨十三年遠忌供養一品経願文旧僕僧営之

仏子〻敬白仏言釈尊一代之諸教五千餘巻之
金文雖広妙経八軸之功能二十八品之玉偈最」17オ
勝始自弥勒発同之語終至普賢誓護之呪品々
皆是如来甚奥之自證段々悉亦衆生頓悟之指南
者也伏惟弘天尊霊赴黄壌而十三年恩山之数
重忽騫(アカル)摧丹府而幾許日涙川三千廻無乾
仍誂彼旧僕遺弟恋恩慕徳之徒以写此正
直但説二十八品之文其料紙則破尊霊之手跡
漉絲麻其道場亦擺尊霊之旧室備香花

願照冥路之闇必添浄刹之餝抑所説必有能
説法宝豈無仏宝仍奉図絵尺迦如来并
普賢文殊形像一鋪顕妙相於尽工之手仰照
臨於亡魂之頂捧所生善根併奉資主若尊
霊転凡登聖捨迷就悟仏則五濁之能化入
淤泥救重苦経亦一如之妙理泯染浄帰平等仏
経功用既爾尊霊得脱何疑乃至法界利益不
限敬白

」17ウ

或女房亡父十三年遠忌修善願文

夫以金口尺迦之説八万蔵也以報恩為其要玄
元聖祖之著五千言也以孝行為厥旨於父母徳誰
忘酬答者乎伏惟慈父幽霊芳骨空化東
岱之煙慈顔永隠西刹之雲以来日往月累
千万緒之悲緒難休歳去歳来十三廻之炎涼
爰改弟子昔在襁褓之裏長隔掬(キク)養之恩伝
聞遺訓唯摧中襟仍纔習丹青之業泣企續

」18オ

尽之功奉図阿弥陀如来并観音勢至等迎摂
像一鋪又兄弟同志骨肉一意各分一巻奉書
写妙法蓮花経一部八巻無量義観普賢等経
各一巻泣迎忌辰敬展供養仏則弟子之微功

」18ウ

也顕面同於孤独之拙掌経亦親族之合力也成
垂露於戚里之同心願照長夜之大暗願霑
仏種之萌芽于時紅花離枝而一旬合掌之粧
尚鮮黄鷽辞林而幾日法音之曲惟新善根得
境其不然乎然則尊霊早登紫金之台永遊
碧玉之殿生死者一夢之間也驚長眠於洪鐘浮
磬之韵安養者十楽之境也開證悟於五根八
正之唱乃至鐵国皆詣金刹敬白

或小僧亡父五七日修善願文

」19オ

夫以南浮不定之境何異於蝸角北芒新旧(キウ)之塚
猶盛於龍鱗雖知無常還迷悲歎伏惟慈父
幽霊年齢早闌筋骨亦衰無病而気絶如油竭而

燈滅告別而眼掩似天瞻而月蔵雖知報命之
有限尚悲恩愛之永隔方今五七之忌景爰
至解脱之勝因宜資仍奉図絵地蔵菩薩像一
鋪奉摺写妙法蓮花経一部八巻開結阿弥陀
経般若心経等経各一巻泣擺旧跡敬展斎莚
弟子薛蘿衣薄蕨薇食乏偏憑幽霊之

」19ウ

眷顧防松門之秋嵐只依先人之扶持送蘭若
之春日今捨三衣一鉢之資貯僅営図仏写経
之恵業仰願三宝照此一心然則尊霊牽無仏
世界度生之導師早出五趣迷暗之衢酬一
乗妙経難思之功力速詣九品之安楽之国乃至
法界平等利益敬白

貞覚僧都四十九日願文弟子貞雲阿闍梨修之

弟子阿闍梨伝燈大法師位貞雲身心不退而白仏
言水蕩之流尽緑波悉帰蒼之底人苒々死去

」20オ

紅顔終沈黄泉之下無常之理自然而然伏惟先

師権少僧都法眼和尚位四明洞中久翫止観明浄之月
三学窓前遙累定恵薫修之日聖主掄其
才早遂講席於三会学徒推其仁忽忝探題於
一山実是法家之梁棟学海之舟楫(シウ)(ゼフ)敢者也爰
自春及冬風水告変日往月来寝膳(シム)(カチ)(ゼン)乖例弟子
内為□(?)□(ッネ)芋之親外存師弟之礼迎醫嘗薬
竭力抽誠然猶病入膏肓花元他之秘方失術
時属濁乱瑠璃光之神咒少験去年窮冬之

」20ウ

天下旬第九之朝草菴燈滅荒厚駕伋当此
時也合両掌而専念不乱閉双眼而気息忽絶
悲歎之腸一時九廻弟子齢在童稚昔別慈父之
芳顔年及而立唯恃幽霊之眷顧今遭此喪引
汲仰誰吁嗟孤山松下泣殿重恩曠徳之遺骸
新墳苔上空拭恋慕懐旧之愁涙蘭若雲
静移居而送五旬矣柴戸風冬隔郷而渉三年
焉哀慟之中々陰既盈仍奉図絵釈迦如来
弥勒文殊像一鋪奉書写妙法蓮花経一部八巻

」21オ

開結阿弥陀経般若心等経各一巻此中於弥陀般若
二経者破幽霊之手跡為料紙手自所奉書写也
懃抽中心敬修小善三衣一鉢忘律儀而脱之
図仏写経励微力而営之仰願三宝哀愍納
受以所生恵業偏資幽儀早摧五道輪廻之
車忽登九品易往之台一心三観者昔所凝也
宿習豈空悪業煩悩者本無躰矣妄執何留
弥依此微善必増彼大果乃至法界利益無辺敬白

先師法印中陰法事願文

「21ウ

敬白
奉図写金泥胎蔵界種子曼荼羅一鋪
奉書写大毗盧遮那経七巻
奉模（ホ）写妙法蓮花経三部廿四巻
　無量義経三巻
　観普賢経三巻
　般若心経三巻

阿弥陀経三巻

件仏経者幽霊平生之昔兼調置之弟子
追報之今敬供養之

以前仏経甄録如右夫以商那和須之伝正法也九色
之衆徒抒箱底優波毱多之誇化道也四寸之
籌空満室中雖恣利生未免必滅者歟伏惟前
権大僧都法印大和尚位徳被幽顕誉喧夷洛初臥台
洞之霜竭筋力於蛍幌之裏後翫魏闕之月銜
明詔於鳳扆之下朝賞頻加早忝崇斑之重任
天感潜通屡逢上玄之霊応論説之道不恥
曩古者也爰齢及衰暮独楽松門竹窓之幽閑
身纒病痾稍有暁風夕霧之相侵携湯薬

而二年邪竇之雲難晴送別駕而一夕寿
域之月長隠弟子芳契年深厚顧月積言其深
恩則両肩疲而難荷負忍彼遺徳亦双眼溺而露
薛服報酬之道欲罷不能是以餝秘密壇之軌儀

22オ

22ウ

嘱瑜伽宗之碩徳当五旬中陰之厚抽一心南無之
誠法界満空之聖速驚梵唄梵讃之響密厳
塵刹之尊尽翫香雲花雲之粧所生恵業併
資幽霊早登一実之宝台莫顧三有之朽宅
嗟吁十法成乗者昔所学也宜備覚路之資粮
五字厳身者今所修也定為密蔵之開鑰然則
遊寂光唯理之宮弥添曼荼無尽蔵之荘厳攀
常在諸法之嶺剰悟究竟如義證之真理乃至鐵（マヽ）
国悉為金刹敬白

建仁三年九月廿日弟子比丘尼真如観敬白

或上人大般若供養諷誦文

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裏

右諷誦善根旨趣如此夫釈尊者忍土之導師也
見衆生如赤子般若者仏界之指南也空諸有同

」23オ

」23ウ

蒼穹能説所説不可不帰是以図三尊一輪之形
像写六百箇巻之真文開題解紐(ヒモ)供養展莚
重驚遍空油麻之聖衆以為今日香花之證明於
戯積微功作大善宛似細流之湛渕抽至誠仰感
応無異畢星之好雨願愍常啼(タイ)焦身之懇
志必垂如来廻眸之照鑒仍所請如件敬白

先師法印四十九日諷誦文

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施

右先師法印大和尚位仲秋八月上旬六日一息不及両
眼空掩以来拭涙而五旬既満銷魂而三秋欲暮
転経誦咒之勤誰致精誠供仏施僧之営不能
点止是以服三衣而不顧律〈儀〉傾一鉢而無惜身命伏請
大士哀愍微善抑十方如来皆住甚深之禅定
六趣群類悉〈洗〉(沈)無明之重睡今叩泗(ビン)濱之三磬驚
凡聖於一時願導黄壌孤独之旅魂今列金刹

24オ

無数之聖衆仍諷誦所請如件敬白

求仏上人為先師修善諷誦文

」24ウ

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施

右為先師法印大和尚位出離穢土往生浄刹聊設小
善以酬大恩重叩藉牢之逸韻普驚花台之
聖衆一音任風遙達十方賢聖之徳五住払雲速
離二種生死之苦抑仏子永捨名利厭大象碍
窓之尾深求解脱刷瘦鳥出籠之翅菩柱松
扉之中更無資貯蘿衲薜襟之外何有餘潤
今慣市中集焦身之志懇作衆下授手之謀仏界有

」25オ

慈必受此善亡魂有霊必鑒此誠嗟呼浄心難発
雖恥野庶之不羈一念不空唯恃渕魚之含
釣願今身為終長離三有之生願幽霊為□広
導四恩之類仍諷誦所請如件敬白

深草上人堂舎勧進帳

仏子相尊敬白

請勧進十方檀那建立一宇仏閣状

右相尊謹案史籍釈尊隠双樹之後二千餘年天竺震旦建精舎之處幾許遺教渡我朝以降六百餘歳道俗貴賤刻仏像之輩寔繁術衢洞□

」25ウ

兮行人継踵皆是伽藍之遺跡也原野粛條兮征馬労蹄莫非梵宇之旧基是以丹菓青蓮之容委窮塵而難弁雲楣霜軒之構尋柱□(メイシ)礎而纔知有情之類孰不悲哉爰仏子去建久六年春於塵土中堀得金銅観世音菩薩像二躯不知往古聖人為仏法護持留道歟又不知大提薩埵為化度利生涌出歟奇而又奇如得玄珠之浮赤水悦而(マヽ)亨悦如遇孤嫁之喪双親即当此時偸発願念争建一宇之精舎以安二躯之形像唯恨坐禅春洞煙霞之喰飡乏観念秋窓薜蘿之衣易破縦

」26オ

発大願豈為微功仍広勧檀那方欲結草堂何
況結縁不空何異渉魚之含釣得脱無疑宛同飛
鳥之出籠其施一昏半銭之人必為見仏聞法之
朋音聞樹下両躯之霊像設地表遺法之滅尽
今見塵中二躰之尊容出地救群類之苦厄出
没雖異利生是同者歟仍奉唱如件

光明山地蔵供養勧進帳

沙門琳賢證真等敬白

一山諸徳致誠可被奉供養地蔵菩薩形像事

26ウ

右地蔵薩埵者功徳名聞之大士悪世能化之導
師也受付属於喜見城之中金言無謬救重苦
於阿鼻獄之底鐵鑊（テツクワク）焦膚大悲代受之誓勇健
超世之願専為我等捨之憑誰仍屡勧有縁之
知識造立一躯之尊像懇誠前至速終其功重案
事情造像者一時之結構也蓮眼早開供養者累
日之薫修也花香何点恭敬積歳頂期来際伏請
一山諸徳旦仰鷲王之誠言旦愍羊僧之勧進日々

拝此像各々抽其誠若献一搏之食若挑孤点之

」27オ

燈必唱千及之宝号以斯二世之引接加之或道俗男
女或尊卑老少若羇旅之客若遊蕩之人入来
此山寄住此砌肆供養致称礼皆所不遮也然則微
善不朽宛叶下種結実之道冥感必応猶同
龍雲虎風之自然仍所唱如件

聖徳太子御廟一切経蔵勧進文

仏子某敬白

欲蒙十方檀那助成造立経蔵一宇状

右案事情聖徳儲君者権化之大士也来我国

」27ウ

而弘正法尺迦如来者忍土之導師也説正法而及
我国云彼云此孰不帰乎是以勧知識於十方請助成
於諸人書写貞元入蔵録所載経律論等五十餘巻
安置阿内国石川郡太子霊廟之傍然鶏距之筆
魚網之紙繕写僅雖終功暮雨之滴暁露之湿巻
軸尚可致損仍立一宇之経蔵欲安五時之真文重請

九州万方緇素男女各拋消塵之財力以助広大之
人願然則教海久湛遙契一増劫之後雲崛添餝
遠至第十滅之初仍所唱如件

└28オ

高野山大伝法院住僧等誠惶誠恐謹言
請被特蒙　天恩以新立塔婆唯公家御願安仏
像遂供養状

右住僧等謹考旧記紀州高野之幽窟者雲
仙遊止之勝地也昔高祖弘法大師振金剛杵点松
巌之下唱辺際定入苔洞之中以来三密加持之
風伴嶺嵐而鎮扇五智潅頂之水与谿流而无絶
爰去長承年中之比有覚鑁上人者悲大会之廃
絶建一宇之精舎　鳥羽禅定法皇忝降　綸旨唯
聖朝之御願忽廻仙駕懃供養之軌儀号之

└28ウ

大伝法院誠有由哉今此院《者塔婆与》中経蔵
鐘楼房舎温室皆悉周備但所欠者塔婆而已
爰住僧等拋三衣傾一鉢奉建立碁之宝塔

莊厳之態雖未具土木之功纔以成可謂貧道
莫大之功濁世希有之善歟今以此塔婆被唯
公家御願安仏像遂供養旦階本願之素懐旦従
先王之旧躅者歟何況検訪傍例非無其跡当
寺之別院覚皇院者兼海上人之草創也以之被唯
鳥羽法皇之御願以権僧正信證為大阿闍梨被遂供
養畢以彼唯之何無勅許哉望請　天恩以件

」29オ

宝塔被唯　聖朝之御願安仏像遂供養然則
鎮護国家之勲凝底露於一心仏法帰敬之政
耀　聖日於万春住僧等誠惶誠恐謹言
　建久七年八月　日　　住僧等
権律師法橋上人位海恵誠惶誠恐謹言
　請被殊蒙　天恩依任日并公請労補権少僧都状
右海恵謹検案内任律師任日之次第補権少僧都者
聖代之流例也然海恵任当宦後経十五年於当時
巡既為第一雖□有一両之上臈不足預登用之
採択或住辺域絶交於華路之月或失本道

」29ウ

隔望於前途之雲爰海恵従公請而積多年之
労嗜一宗而致三餘之勤四海静謐之祈念専
守高祖之遺誡五部瑜伽之練行荀伝相承之
雅訓論其用捨取非同日是以重案先例去安
元二年五月道仁為律師二超一人拝任権少僧都
文治元年正月道顕為律師二超一人転任建久
元年五月行智超五人拝除是皆優其道之
労績偏。〈其器之〉庸浅之故歟今任彼等之近例望預理
運之恩恤何況律師之一二三相並転任其蹤寔
繁所謂保元三年十二月覚珍公経覚智同時
転任治承三年正月杲海良智顕舜亦同時
拝任文治三年五月覚増　寛忠　仁隆亦相並
拝除自餘之例不遑毛挙至保元々年五月者
覚讃　宗覚　仲胤　実寛四人相並同時拝
任以彼案之縦雖非任日之第一何不浴恵露之
恩沢海恵雖稟性於至愚雖謝誉於群賢一

」
30
オ

道採用随分非無故二品親王許入壇而写金瓶
後白川太上皇降恩勅而賜紫衣今奉遇無
偏之化弥欲応有道之撰望請　天恩被拝任仲
宦者深抽懇府一心之精誠奉禱蓬宮万

」30ウ

年之宝算矣海恵誠惶誠恐謹言

元久元年五月　日　権律師法橋上人位海恵

東寺僧綱大法師等謹言

興福寺衆徒経奏聞法衣色事

右謹案律蔵福田無相之法衣者比丘最上之重
宝也解脱壇相之標幟故速止毒龍悪鬼之瞋
害恒沙諸仏之被服故専致諸天善神之守護着
脱之方軌染縫之儀則事非聊爾委悉律文然五
濁乱漫之時三学銷没之命法滅之色盛弘謬訛之

」31オ

風頻扇爰興福寺衆徒悲恵燈之欲滅観戒
珠之失光忝驚　叡聞請護正軌尤叶道理何
達　聖鑒夫正像尽而至末法行證隠而残教法

断式證理佳聞古賢之名護禁修徳誰伝如
説之儀雖然百八煩悩者心内之障也凡智実難
伏三衣色形者身外之餝也愚慮尚可改一戒一
禁豈不持哉但我朝白色袈裟濫觴不知何時
星霜久積感儀慣来権化聖者異域神人生吾
国来吾国自昔至今其幾許乎何不改之何不

└31ウ

題発心願聴解脱仰證明殊調百種之浄財以
宛一座之壇施多是婦女之服既異或又妄染
之資具也翠黛紅粉徒為懐服之媒焉蜀
錦呉綾豈非裝身之備哉今捨此等敬奉
三宝改容餝為相好之業翻綺羅為瓔
珞之荘此身報尽後永不受女身彼八歳
龍畜之姿雖唱正覚於無垢界之月此百悪
凡愚之質厭作妨障於修行地之風不如早
成大丈夫以期無上覚抑或晨昏同受之

└32オ

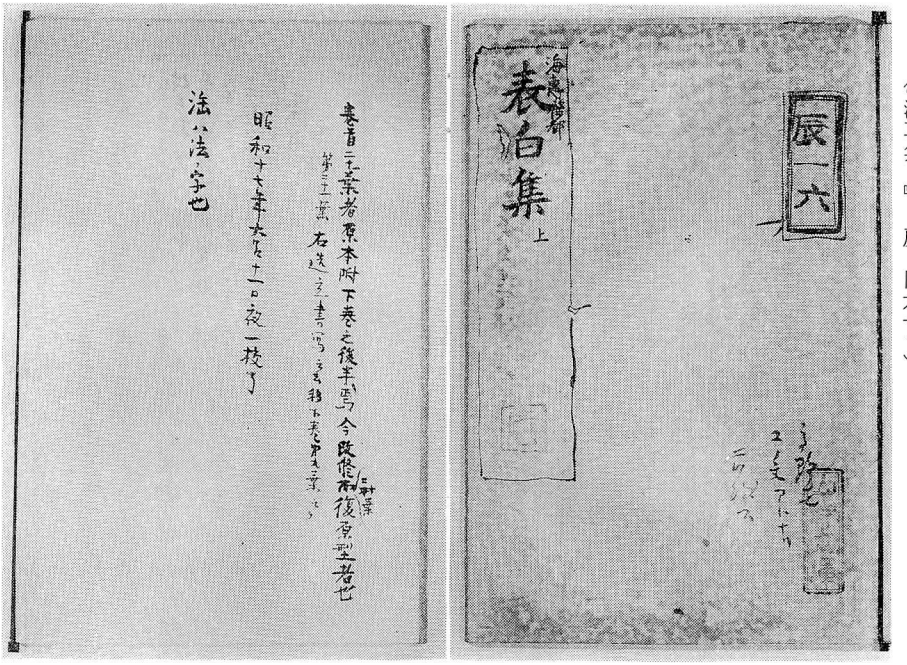
人或芝蘭結契之朋与此善助我願宜分功

徳於平等遍覃利益於無遮方今鬱々
煩悩之猛火欲火尤熾漫々生死之苦海愛
海殊深無比見世尊摩鄧嬈阿難雖為宿
因過先難避何況深宮思婦妬梁鵞之
双栖幽閨寡妄驚塞鴻之一声妄想輪
廻之基唯在此念者歟弟子自今身至仏身
永止非梵行離悪縁逢善縁終諧不退転仰
請弥勒慈尊妙法経王悉知照見哀愍納受

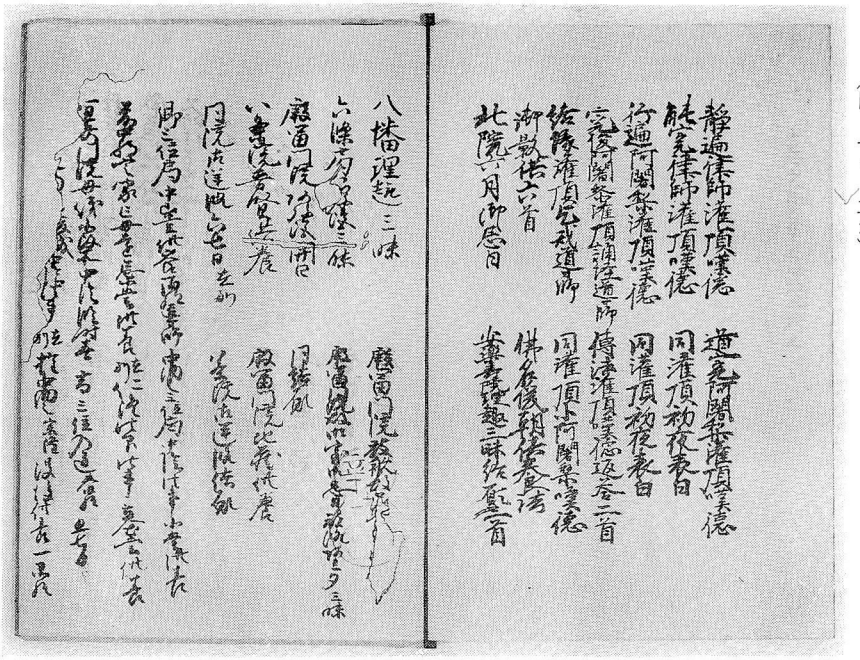
└32ウ

糺之縦雖古風不可及巨難伏惟聖断神速
叡鑒克明唯可在鳳銜之左右何必□(?)(羊)愚
之奏解然而八宗章疏学海之波眇范五部
律蔵戒山之峯岌業仍下勅命於諸宗決
是非於明徳皇化之至也政徳之甚也訪于蒭
尭議于台鄰古聖格言在今可歓幸甚
々々東寺僧綱大法師等謹蒙　綸旨奏達如件
元久元年八月　日　僧綱大法師等

└33オ

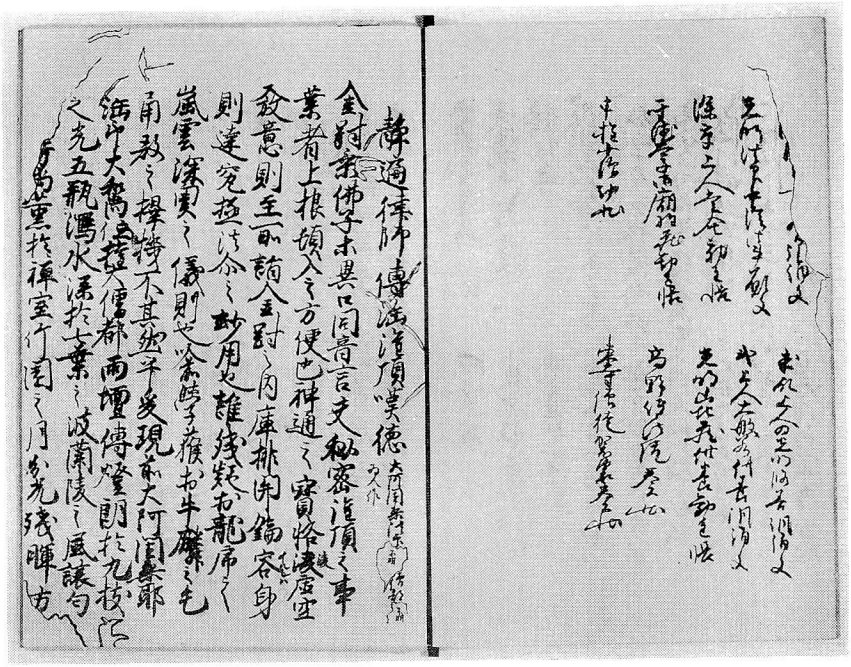


（『海草集上』　扉・同六十ウ）

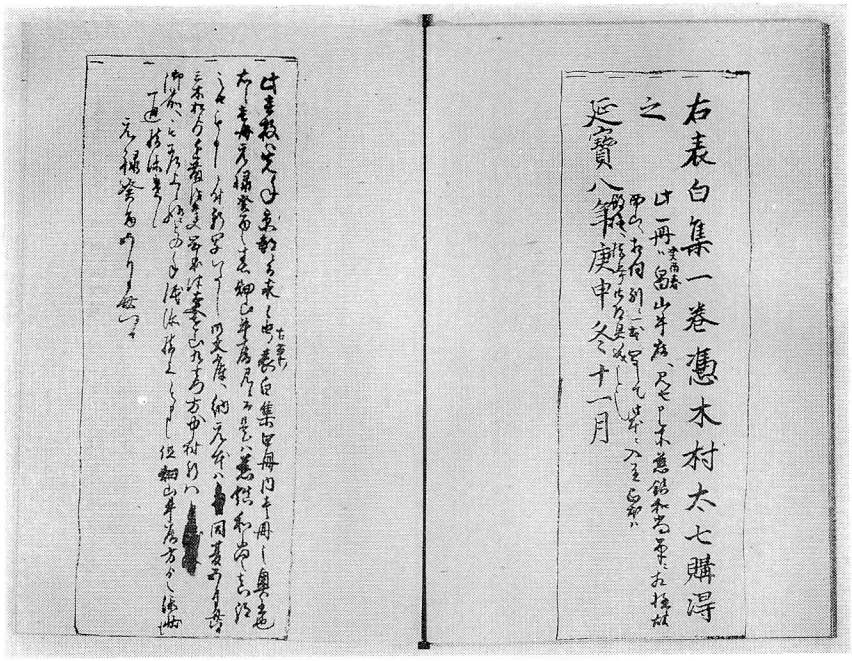


（同　一ウ・二オ）

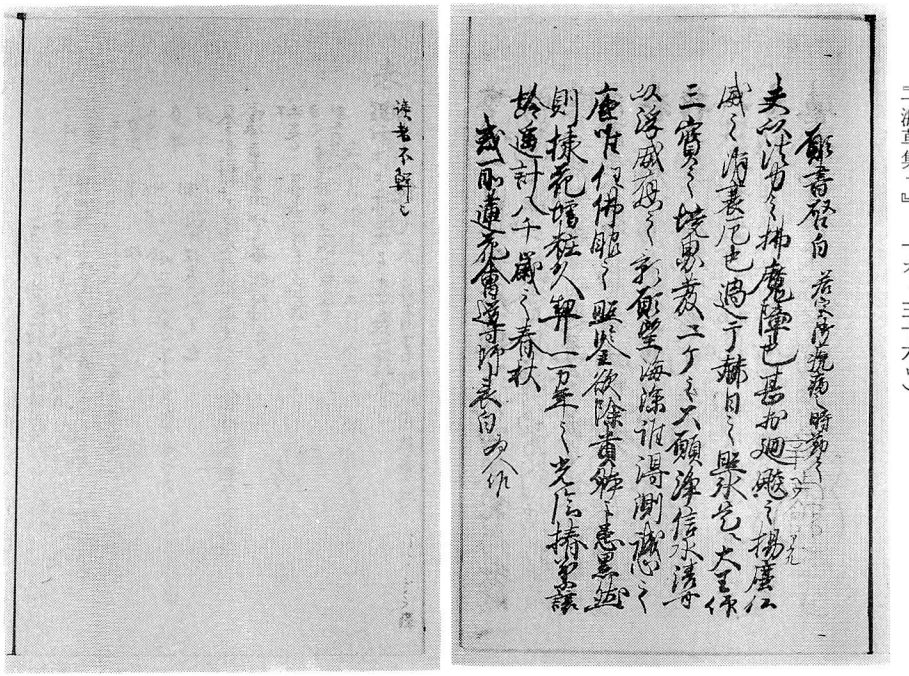
（同　三ウ・四オ）



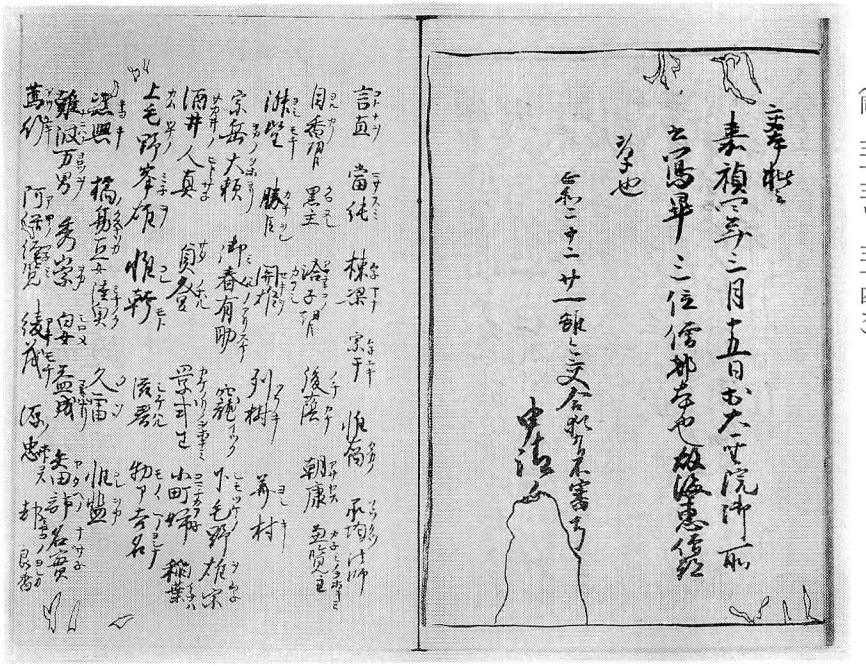
（同　五十九ウ・六十オ）



『海草集下』　一オ・三十六ウ）



（同　三十三ウ・三十四オ）



（同　三十四ウ・三十五オ）

夏殷周秦漢魏
晉宋陳隨唐梁
宋

右表白集二卷憑木村大七購得
之
延寶九年辛酉秋七月

（同　三十五ウ・三十六オ）

表白集　二卷　彰考館本也
去八月借来　十二月写了　依頼原田氏者也
緑行書　同時書写也
昭和十七年　六月　九日　早朝識之　山本延吉

本書即是海草集也
目次端欠　今以親王院補之　又有微誤　即修正焉
故上下低数不同也
原本
上巻　元題簽　本文墨付三十七葉
目次　二葉
本文　六条局の保陸之妻間白　以下　千手法春白　遠水を主月白　近
下巻　有題簽　本文墨付五十四葉
本文　願書祭白　孝子保虎無特動之　以下　世三葉迄　一部也
三十三葉　最有奥書　三十三葉　即人名等也

三十四葉　即、新遍律師傳法灌頂及受戒之後、大師の御弟子となり、後鳥羽院の御願により、仁治
以下五十三葉　殿富門院被供養　故御室所各日理趣三昧之時書也
五十四葉　右造主　中宮　西園寺　喜子　御夫五輪之母　相者法名
因徳し　物解一条　東北者諸家之者之所
頃七　之之

之之　有之　此二葉　弐巻　第九葉相当者也　即　数山千本宰
都　彼女　供養　御文也

今日親王院及目次　正巻序　修　保誤　刻本者也
海草集　六巻本　始得之之矣　　孝延　吉識
下巻　上巻
目次　上下巻　倒之　上巻　下巻
刻本也
昭和十七年十六月十一夜一校了
原本　絶筆　甚多　誤有　裏打紙用紙　摩擦　蝕　失　之　難